

上海博楚簡『民之父母』譯注

西山尚志

凡例

- 一、本稿は、『上海博物館藏戰國楚竹書（二）』の『民之父母』全文の譯注であり、それぞれ「本文」「訓讀」「口語譯」「注釋」から成っている。
- 二、底本には、馬承源主編、上海古籍出版社出版・發行、2002年12月第1版第1次印刷の『上海博物館藏戰國楚竹書（二）』を用いた。
- 三、『民之父母』とする篇題は、もともとこの竹簡には存在しなかったものであるが、底本が『民之父母』と稱しているので、本譯注でもそれを踏襲して用いることにした。
- 四、「第一章」「第二章」などの章の指定は、もともと『民之父母』には存在せず、譯注と閲讀の便宜のために譯注擔當者において假に定めたものである。
- 五、『民之父母』の「本文」の文字は、基本的には底本の「釋文考釋」によったが、その「圖版」にも目を通して、抄寫された時點における本來の文字を復元しようと努めた。

異體字や俗字は可能な限り「圖版」のままとしたが、都合により正漢字や常用漢字などに改めざるをえなかった箇所がある。またすでに發表された諸研究に基づいて、底本の「釋文考釋」の文字などを改めた箇所もある。

「本文」中の異體字・俗字・假借字・省字は、その文字の下に何の異體字・俗字・假借字・省字であるかを「()」に入れて示し、錯字の場合は、その文字の下に正字を「〈 〉」に入れて示した。

殘缺の文字（缺字）は、それが推測できる場合には龜甲符號「[]」の中に文字を入れた。以上のいずれの場合にも、そうであると認める理由は何かなどを後の「注釋」に記した。

符號の「ㄥ」及び重文符號（おどり字）あるいは合文符號の「||」はそのままとした。

日本語式の句點「。」と讀點「、」とは『民之父母』になく、譯注者が付したものである。

その本文が『民之父母』それぞれの第何號簡にあるかを示す「第號簡」は、底本の「圖版」に基づいて記入した。

- 六、「訓讀」の訓讀文は、現代假名遣いを採用している。

殘缺の文字や判讀できない文字（缺字）を推測して訓讀する場合は、訓讀文を龜甲「[]」の中に入れた。

書名は二重かぎ「『 』」でくくった。

（その他の「訓讀」についての、「本文」と重複する凡例は省略する。）

- 七、「口語譯」は、平易な現代語に譯することに努めたが、流麗な美文に彫琢する

ことはしなかった。

使用する漢字は原則として正漢字（舊漢字）である。ただし、ワード・プロセッサの性能や制限のため、必ずしも原則通りではない箇所もある。

文意を明瞭にするために補って口語譯した部分は、括弧「（）」に入れた。（その他の「口語譯」についての、「本文」「訓讀」と重複する凡例は省略する。）

【關係論著目録】

「圖版」：馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』圖版（上海古籍出版社、二〇〇二年十二月）

「濮茅左」：濮茅左「民之父母」釋文（『上海博物館藏戰國楚竹書』上海古籍出版社、二〇〇二年十二月）

「黃錫全」：「楚簡續貂」（『簡帛研究』第三輯、中國社會科學院簡帛研究中心編輯、廣西教育出版社、一九九八年十二月）

「曹峰」：曹峰「上海博物館展示の楚簡について」（『郭店楚簡の思想史的研究』第二卷、東京大學郭店楚簡研究會、一九九九年十二月十五日）

「曹峰2」：曹峰「試析已公布的二支上海戰國楚簡」（簡帛研究網、二〇〇〇年十二月十七日）に初出、その後は『郭店楚簡の思想史的研究』第五卷（「古典學の再構築」東京大學郭店楚簡研究會編、二〇〇一年二月一日）に採録

「李銳」：李銳「上海館藏楚簡（二）初札」（簡帛研究網、二〇〇三年一月六日）

「劉信芳」：劉信芳「上博藏竹書試讀」（簡帛研究網、二〇〇三年一月九日）

「劉樂賢」：劉樂賢「讀上海簡《民之父母》等三篇札記」（簡帛研究網、二〇〇三年一月十日）

「季旭昇」：季旭昇「讀《上博（二）》小議」（簡帛研究網、二〇〇三年一月十二日）

「龐樸」：龐樸「喜讀“五至三無”」一初讀《上博藏簡（二）》（簡帛研究網、二〇〇三年一月十二日）

「安徽」：安徽大學古文字研究室「上海楚竹書（二）研讀記」（簡帛研究網、二〇〇三年一月十三日）

「何琳儀」：何琳儀「滬簡二冊選釋」（簡帛研究網、二〇〇三年一月十四日）

「孟蓬生」：孟蓬生「上博竹書（二）字詞筭記」（簡帛研究網、二〇〇三年一月十四日）

「龐樸2」：龐樸「試說“五至三無”」（簡帛研究網、二〇〇三年一月十五日）

「林素清」：林素清「上博（二）《民之父母》幾個疑難字的釋讀」（簡帛研究網、二〇〇三年一月十七日）

「陳劍」：陳劍「上博簡《民之父母》“而得既塞於四海矣”句解釋」（簡帛研究網、二〇〇三年一月十八日）

「黃德寬」：黃德寬「《戰國楚竹書》（二）釋文補正」（簡帛研究網、二〇〇三年一月二十一日）

「楊澤生」：楊澤生「援簡釋帛新例」（簡帛研究網、二〇〇三年二月三日）

- 「楊澤生 2」：楊澤生「《上海博物館所藏竹書（二）》補釋」（簡帛研究網、二〇〇三年二月十五日）
- 「張豐乾」：張豐乾「《民之父母》“得氣”說」（簡帛研究網、二〇〇三年二月二十五日）
- 「黃錫全 2」：黃錫全「讀上博楚簡（二）札記（壹）」（簡帛研究網、二〇〇三年二月二十五日）
- 「蘇建洲」：蘇建洲「《民之父母》簡 1「詔」字再議」（簡帛研究網、二〇〇三年二月二十七日）
- 「龐樸 3」：龐樸「再說“五至三無”」（簡帛研究網、二〇〇三年三月十二日）
- 「季旭昇 2」：季旭昇「《上博二》小議（二）：《民之父母》「五至」解」（簡帛研究網、二〇〇三年三月十九日）
- 「楊澤生」：楊澤生「上海博物館所藏竹書札記」（簡帛研究網、二〇〇三年四月十六日）
- 「龐樸 4」：龐樸「五至・養氣・心齋」（簡帛研究網、二〇〇三年四月十九日）
- 「顏世鉉」：顏世鉉「上博楚竹書補釋二則」（簡帛研究網、二〇〇三年四月二十九日）
- 「季旭昇 3」：季旭昇「民之父母譯釋」（季旭昇主編『《上海博物館藏戰國楚竹書（二）》讀本』萬卷樓圖書股份有限公司、二〇〇三年七月）
- 「李天虹」：李天虹「上博館藏竹書（二）雜識」（簡帛研究網、二〇〇三年九月十七日）
- 「趙建偉」：趙建偉「讀上博簡（二）札記七則」（簡帛研究網、二〇〇三年十一月九日）

第 一 章

本 文

〔子〕晷(夏)竊(問)於孔子、【1】「詔(詩)曰、『幾(凱)倂(弟)君子、民之父母。』【2】敢竊(問)、可(何)女(如)而可胃(謂)民之父母。」【3】孔 卍(孔子)會(答)曰、「民(以上第一號簡)〔之〕父母虎(乎)。必達於豊(禮)縗(樂)之簾(原)、【4】己(以)至(致)五至、己(以)行三亡(無)、己(以)皇(橫)于天下。【5】四方又(有)敗(敗)、必先誓(知)之。示(此)(以上第二號簡)〔之〕胃(謂)民之父母矣。」【6】

訓 讀

〔子〕晷(夏)孔子に竊(問)う、「詔(詩)に曰わく、『幾(凱)倂(弟)たる君子は、民の父母。』、と。敢えて竊(問)う、可(何)女(如)にすれば而ち民の父母と胃(謂)う可きか。」孔 卍(孔子)會(答)えて曰わく、「民〔の〕父母か。必ず豊(禮)

縵(樂)の簠(原)に達し、己(以)って五至を至(致)し、己(以)って三亡(無)を行い、己(以)って天下に皇(横)う。四方に敗(敗)又(有)れば、必ず先にこれを暫(知)る。示(此)れを〔之〕れ民の父母と冒(謂)う。」

口語譯

〔子〕夏は孔子に尋ねた。「『詩』に、『凱弟たる君子は、民の父母。』とあります。では、あえてお尋ねします。どのようにすれば民の父母とすることができるのでしょうか。孔子は答えて言う、「民〔の〕父母のことか。必ず禮樂の根本に達し、そして五至を極めて、そして三無を行い、そして天下に充たします。四方に災いがあれば、必ず事前にこれを察知する。このようなものを民の父母と言うのです。」

注 釋

【1】「〔子〕晷(夏)窟(問)於孔子」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

孔子閒居、子夏侍。子夏曰、敢問

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

子夏侍坐於孔子曰、敢問

に作る。

「子」は、「濮茅左」・「季旭昇3」に従って「子」を補う。本篇において、簡首から簡尾まで完全に残っている簡は第五號簡のみである。ここから推測するに一簡あたり約三十三字程度書かれていたはずである。「濮茅左」の指摘するとおり、当該簡は簡首が残缺しており、三十二字残っている。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「子」に作る。

「晷」は、「黄錫全」・「曹峰」・「安徽」は「晷」に作るが、「圖版」・「濮茅左」・「季旭昇3」に従って「晷」に作る。「晷」は「晷」の異體字であると考え、「夏」と讀む。

「晷」は、「濮茅左」は当該字を『玉篇』所收の「咤」字ではないか、と推測しているが不明。同様の字形は包山楚簡第二四〇號簡に見える。また、当該字と同類の字形としては「晷」が挙げられる。「晷」は上海博楚簡『緇衣』第十八號簡、郭店楚簡『緇衣』第三十五號簡、郭店楚簡『唐虞之道』第十三號簡に二例、それぞれ見られる。「晷」字の解釋については、『郭店楚簡の思想史的研究』第四卷（「古典學の再構築」郭店楚簡研究會編、二〇〇〇年六月一日）所收の「郭店楚墓竹簡『緇衣』譯注（下）」六十一～六十三頁（李承律氏擔當箇所）に詳しく、「晷」字は「夏」の異體字の「顯」の省字としている。

また、「濮茅左」は甲骨文では「它」は「虫」における字形上の區別はなかったとしているが、不明。任意に『甲骨文編』（中國社会科學院考古研究所編輯、中華

書局、一九六五年)の「它」字を見ると、一部の「它」字は「虫」に従っているの
がわかる。また、『説文解字』它部に、

𧈧、虫也。从虫而長。象冤曲𧈧尾形。上古艸𧈧患它。故相問無它乎。凡它之屬
皆从它。

とあり、「虫」と「它」は形の上でも、意味の上でも近いことがわかる。よって、
「𧈧」は「𧈧」の異體字と考えてよいだろう。

「窳」は、「聞」の古文である「昏」の異體字。同様の字形は包山楚簡第一五七
號簡・望山楚簡一・五十一號簡に見え、何琳儀『戰國古文字典』(中華書局、一九
九八年九月)一三一二頁は、「窳、从宀、昏聲。疑昏之繁文。」としている。また類似す
る字形として「𧈧」「昏」が挙げられるが、「𧈧」は郭店楚簡・包山楚簡・望山楚
簡・九店楚簡など見え、「昏」は中山王鼎に見ることができる。「昏」字は『説文
解字』耳部に、

𧈧、知聞也。从耳門聲。𧈧、古文从昏。

とあり、「聞」の古文であることがわかる。当該字は「聞」の古文である「昏」(鏡
字としては「𧈧」)の繁文であると考ええる。

「窳」は、「問」と讀む。「問」と「聞」は傳世文獻中でも通假例が多く、例え
ば『詩經』大雅江漢の「明明天子、令聞不已。」を『孔子家語』問玉篇は引用して、
「明明天子、令聞不已。」としている(高享編『古字通假會典』(齊魯書社出版、
一九八九年)一五六頁参照)。また、「問」と「聞」はともに明母文部に屬し假借
可能。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「問」に作る。

「於」は、「濮茅左」・「曹峰」・「季旭昇3」に従って「於」に作る。しかし、本
來ならば当該字は「烏」の省字。『説文解字』鳥部に、

𧈧、孝鳥也。象形。孔子曰、烏呼也。取其助乞。故以爲烏呼。凡鳥之屬皆从
鳥。𧈧、古文鳥。象形。𧈧、象古文鳥省。

とある。下線部における段玉裁注には、

此卽今之於字。古文鳥而省之。

とある。「烏」字から「於」字への字形的變化は、何琳儀『戰國古文字典』「烏」
字(四三九～四四〇頁)に詳しい。『説文解字』にせよ、『戰國古文字典』にせよ、
「於」字を親字として獨立させていない。しかし、ここでは暫時「於」に作ること
とする。

【2】「詔(詩)曰、幾(凱)悌(弟)君子、民之父母。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

詩云、凱弟君子、民之父母。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

詩云、愷悌君子、民之父母。

に作る。

「詔」は、「濮茅左」は「詔」に作り、「詩」の異體字と考えている。「曹峰」は「詔」に作る。「黄錫全」は、「這條簡文詩作告。此形右旁則可能爲“告”、是“ㄣ”借用“言”右邊的筆劃以爲“止”。但也可能是“詣”字、借爲詩。」とする。また、「劉樂賢」は、「從照片看、此字右邊的聲旁實爲“頤”的篆文(据《說文》)。該字古音是之部喻紐、而詩字古音之部書紐、音近可通。古書苙字或作“苙”“苙”(參看《古字通假會典》第三九七頁)、可以爲証。」としている。「蘇建洲」は「詔」に作り、「市」を聲符として「詩」と通假可能とする。「季旭昇3」は「詩」に作る。ここでは、「詔」に作る。當該字右上部は「之」の訛變と考える。本篇第一號簡に「之」字が二例あるが、この「之」字は當該字右上部と同様に、二畫の左はらいと一畫の縦畫を有する特徴的な字形である。當該字はこのような「之」字の訛變であると考えられる。

「詔」は、「詩」と讀む。當該字の聲符となる「之」は章母之部、「詩」は書母之部に屬す。聲母は舌上音、韻部は同じであり、通假可能。また、「詔」の下文は『詩經』の文章が續く上、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「詩」に作るため、當該字を「詩」と讀むことは間違いないだろう。

「幾」は、「濮茅左」・「曹峰」・「季旭昇3」は「幾」に作るが、「圖版」に忠實に従って「幾」に作る。同様の字形は郭店楚簡『老子』甲本第二十五號簡、郭店楚簡『五行』第四十八號簡などに見える。「幾」は「幾」の省字または異體字。

「幾」は、「凱」と讀む。『禮記』孔子閒居篇は「凱」に作り、『孔子家語』論禮篇・『魯詩』・『韓詩』は「愷」に作り、『毛詩』は「豈」に作る(王先謙『詩三家義集疏』参照)。『漢字古音手冊』によると、「幾」は見母微部、「豈」は溪母微部に屬す。聲母はともに喉音、韻部は同じであり、通假可能。「幾」と「豈」の典籍上における互用・通假例は多く、「濮茅左」も指摘するとおり、例えば『戰國策』楚策四は「則豈楚之任也我。」とあり、馬王堆帛書『戰國縱橫家書』では「幾楚之任」に作っている(『古字通假會典』五一五頁参照)。ここでは、「濮茅左」・「曹峰」・「季旭昇3」・『禮記』孔子閒居篇に従って「凱」と讀むこととする。

「悌」は、「弟」の異體字または通假字。「濮茅左」も指摘するとおり、同様の字形は包山楚簡第二二七號簡に「覩悌無後者」とあり、「覩悌」は「兄弟」と讀まれている。その他にも、同様の字形は上海博楚簡『昔者君老』第一號簡に三例看取でき、いずれも「弟」と讀まれている(『上海博物館藏戰國楚竹書』(二)二四二頁参照)。

『禮記』孔子閒居篇・『毛詩』大雅洞酌は「弟」、『孔子家語』論禮篇・『魯詩』・『韓詩』は「悌」にそれぞれ作る(王先謙『詩三家義集疏』参照)。「濮茅左」は如字で讀み、「季旭昇3」は「悌」と讀むが、ここでは「曹峰」・『禮記』孔子閒居篇・『毛詩』大雅洞酌に従って「弟」と讀むこととする。

「母」は、「濮茅左」・「曹峰」・「季旭昇3」は「母」に作るが、「圖版」を子細

に見ると当該字は「母」と「毋」の双方の特徴を有していることが看取できる。ここでは暫時、当該字を「母」に作ることにする。「母」は、石鼓文や郭店楚簡『語叢四』第六號簡など、「母」に作って「毋」と讀む例は多い。また、上海博楚簡『昔者君老』第一號簡第十三字目、二十八字目、四十五字目、『容成氏』第十三號簡第二十七字目は明らかに「毋」に作り、「母」と讀まれている（『上海博物館藏戰國楚竹書』（二）二四二頁の釋文は、「母」に作っているが、これは誤り）。また、容庚『金文編』「母」字の注では、「毋、與母爲一字。」としている。また、何琳儀『戰國古文字典』「母」字（一二八頁）には、「戰國文字母、多讀母、否定副詞。」と指摘している。また、「母」と「毋」の通用關係については、大西克也「論“母”“無”」（『古漢語研究』一九八九年第四期）に詳しい。一般的に「母」は魚部に屬すと考えられているが、大西克也氏は「母」と同じく「毋」も魚部に屬すと考えている。このように、この時期は「母」と「毋」が字形上でも混亂していたと考えられる。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇・『詩經』大雅泂酌は「母」に作る。

「幾（凱）悌（弟）君子、民之父母。」について。同様の文章は、『詩經』大雅泂酌に、

泂酌彼行潦、挹彼注茲。可以餽饁、豈弟君子、民之父母。

泂酌彼行潦、挹彼注茲。可以濯鬢、豈弟君子、民之攸歸。

泂酌彼行潦、挹彼注茲。可以濯漑、豈弟君子、民之攸暨。暨

とある。また、この句を引用する文獻は、『孝經』廣至德章第十三に、

詩云、愷悌君子、民之父母。非至德。其孰能順民如此其大者乎。

とあり、『管子』輕重丁篇に、

使者曰、君令曰、寡人聞之、詩曰、愷悌君子、民之父母也。寡人有崢丘之戰。

吾聞、子假貸吾貧萌、使有以給寡人之急、度寡人之求。使吾萌春有以傳耜、夏有以決芸、而給上事、子之力也。是以式璧而聘子、以給鹽菜之用、故子中民之父母也。

とあり、『大戴禮記』衛將軍文子篇に、

業功不伐、貴位不善、不侮可侮、不佚可佚、不敖無告。是顓孫之行也。孔子言之曰、其不伐、則猶可能也。其不弊百姓者、則仁也。詩云、愷悌君子、民之父母。夫子以其仁爲大也。學以深、厲以斷。送迎必敬、上友下交、銀手如斷、是卜商之行也。

とあり（『孔子家語』弟子行篇もほぼ同じ）、また、『荀子』禮論篇に、

君之喪、所以取三年何也。曰、君者治辨之主也。文理之原也。情貌之盡也。相率而致隆之、不亦可乎。詩曰、愷悌君子、民之父母。彼君子者、固有爲民父母之說焉。父能生之、不能養之。母能食之、不能教誨之。君者、已能食之矣、又善教誨之者也。三年畢矣哉。

とあり、『禮記』表記篇に、

子言之、君子之所謂仁者、其難乎。詩云、凱弟君子、民之父母。凱以強教之。

弟以説安之。樂而毋荒、有禮而親、威莊而安、孝慈而敬、使民有父之尊、有母之親。如此而后可以爲民父母矣。非至德其孰能如此乎。今父之親子也、親賢而下無能。母之親子也、賢則親之、無能則憐之。母親而不尊。父尊而不親。

とあり、『呂氏春秋』不屈篇に、

惠子聞之曰、不然。詩曰、愷悌君子、民之父母。愷者、大也。悌者、長也。君子之德、長且大者、則爲民父母。父母之教子也、豈待久哉。何事比我於新婦乎。

とあり、『史記』孝文本紀に、

詩曰、愷悌君子、民之父母。今人有過、教未施而刑加焉。或欲改行爲善而道毋由也。朕甚憐之。夫刑至斷支體、刻肌膚、終身不息、何其楚痛而不德也、豈稱爲民父母之意哉。其除肉刑。

とあり、『新書』卷七に、

詩曰、愷悌君子、民之父母。言聖王之德也。

とあり、『韓詩外傳』卷六に、

詩曰、愷悌君子、民之父母。君子爲民父母何如。曰、君子者、貌恭而行肆、身儉而施博、故不肖者不能逮也。殖盡於己、而區略於人、故可盡身而事也。篤愛而不奪、厚施而不伐。見人有善、欣然樂之、見人不善、惕然掩之、有其過而兼包之。授衣以最、授食以多。法下易由、事寡易爲。是以中立而爲人父母也。築城而居之、別田而養之、立學以教之。使人知親尊親。尊故父服斬纓三年、爲君亦服斬纓三年、爲民父母之謂也。

とあり、『韓詩外傳』卷八に、

孔子曰、所父事者三人、所兄事者五人、足以教弟矣。所友者十有二人、足以祛壅蔽矣。所師者一人、足以慮無失策、舉無敗功矣。惜乎不齊、爲之大功、乃與堯舜參矣。詩曰、愷悌君子、民之父母。子賤其似之矣。

とあり、『説苑』政理篇に、

公曰、若是則寡人貧矣。孔子曰、詩云、愷悌君子、民之父母。未見其子富而父母貧者也。

とあり（『孔子家語』賢人篇もほぼ同じ）、『白虎通義』號篇に、

或稱君子者何。道德之稱也。君之爲言羣也。子者、丈夫之通稱也。故孝經曰、君子之教以孝也、所以敬天下之爲人父者也。何以知其通稱也。以天子至于民。

故詩云、愷悌君子、民之父母。論語曰、君子哉若人。此謂弟子、弟子者、民也。

とある。この中で、この「愷悌君子、民之父母」という概念に對して説明している文獻は、『荀子』禮論篇・『禮記』表記篇・『呂氏春秋』不屈篇・『韓詩外傳』卷六であるが、これらで描かれている「愷悌君子、民之父母」は、複数の異なったベクトルの能力を併せ持つ存在として描かれている。

【3】「敢竊（問）、可（何）女（如）而可胃（謂）民之父母。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

何如斯可謂民之父母矣。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

何如斯可謂民之父母。
に作る。

「而」は、「黄錫全」は「禿」に作り、「斯」と讀むが、「圖版」・「濮茅左」・「曹峰」・「劉樂賢」・「季旭昇 3」に従って「而」に作る。

【4】「孔 ㊦ (孔子) 會(答)曰、民[之]父母虎(乎)。必達於豊(禮)綫(樂)之簠(原)」について。

『禮記』孔子閒居篇は、
夫民之父母乎。必達於禮樂之原
に作り、『孔子家語』論禮篇は、
夫民之父母。必達於禮樂之源
に作る。

「會」は、「濮茅左」・「曹峰」・「季旭昇 3」は「會」に作るが、「圖版」に従って「會」に作る。「會」は「會」の省字または異體字。同様の字形は傳世文獻中において『玉篇』會部に見え、「會」の古文とされている。また、『説文解字』會部に、

會、合也。从亼、曾省。曾、益也。凡會之屬皆从會。𠄎、古文會如此。
とあり、「會」と「合」との密接な關係が看取できる。また、例えば『爾雅』釋詁上篇に、

故郤盍翕仇偶妃匹會、合也。
とあり、また同じく『爾雅』釋詁上篇に、
妃合會、對也。
とある。また、字形上では、先に挙げた『説文解字』所收「會」字の古文の他に、
・『汗簡』所收「會」字の「石經」・『古文四聲韻』所收「會」字の「石經」もまた「合」に従っている。

また、同様の字形（「會」または「會」）は包山楚簡・望山楚簡・郭店楚簡などに見られ、例えば郭店楚簡『老子』甲篇第三十四号簡に、

未智(知)牝戊(牡)之會旁(𠄎)惹(怒)、精之至也。
とあり、この「會」字は馬王堆帛書『老子』乙本では「會」に作り、『老子』第五十五章は「合」に作る。『漢字古音手冊』によると「合」は匣母緝部、「會」は見母月部に屬す。「合」「會」は共に聲母は喉音に屬すが、韻部が合わない。しかし、「會」と「合」の通假は上述したとおり問題はないだろう。ここでは當該字の聲符は「合」であると考える。

「會」は、「濮茅左」・「曹峰」は當該字を「答」と讀む。「答」は端母緝部に屬し、聲母は必ずしも近くはない。しかし、「合」に作り「答」と讀む例は、『春秋左氏傳』宣公二年に、
既合而來奔。

とあり、杜預注に「叔牂言畢、遂奔魯。合猶荅也。」とある。また、睡虎地秦墓竹簡『封診式』第七十五號簡に、

自殺者必先有故、問其同居、以合其故。

とあり、馬王堆帛書『戰國縱橫家書』に、

奉陽君合臣曰、…

とあり、この「合」字はそれぞれ「答」と讀まれている。また、銀雀山漢墓竹簡にも「合」字に作り、「答」と讀む例はしばしば見られる。また、「濮茅左」は『集韻』入合の「答、倉、高、徳合切、當也。古作倉、高、通作答。」を引用し、陸德明『爾雅音義』の「倉、古答字。一本作荅。」などを引用するが、當該字と「倉」や「高」が同定できるかどうかははっきりしない。ちなみに、「荅」（「荅」は「答」の古今字。）は、『汗簡』所收「牧子文」・「石經」、『古文四聲韻』所收「石經」に見えるが、字形上、當該字と近似しているのが看取できることを指摘しておく。また、「濮茅左」も指摘するとおり、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「孔子曰、……」とあり、當該字と對應する文字はない。

「之」は、「濮茅左」・「曹峰」・「季旭昇3」に指摘する通り「之」を補う。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「之」に作る。

「虎」は、「濮茅左」は「虍」に作り、「疑「虍」省形。」とするが、「圖版」・「曹峰」・「季旭昇3」に従って「虎」に作る。「濮茅左」は「與簡文「虎」似有別。」と指摘する通り、確かに「虎」の字形とはやや異なっている。また、「濮茅左」は當該字を「或釋作「虎」、讀爲「乎」。」と言及しているが、しばらくこの説に従うこととする。湯余惠「略論戰國文字形體研究中的幾個問題」（『古文字研究』第十五輯、中華書局、一九八六年六月）では、「古文字寫在下面的人旁、有時會變作「壬」。」とし、その例を擧げている。當該字は「人」と「壬」の變化の間にあるのかもしれない。

「虎」は「乎」と讀む。『漢字古音手冊』によると、「虎」は曉母魚部、「乎」は匣母魚部に屬す。聲母は共に牙喉音に屬し、韻母はともに同じであり、通假可能。『禮記』孔子閒居篇は「乎」に作る。『孔子家語』論禮篇に對應する字はない。

「達」は、「濮茅左」・「季旭昇3」は「達」に作り、「曹峰」は「道」に作る。ここでは、暫時「濮茅左」・「季旭昇3」に従って「達」に作る。

當該字と類似する字形は、郭店楚簡『性自命出』第五十四號簡の第十七字目、包山楚簡第一二一號簡の第二十四字目、『古璽彙編』所引の3528が擧げられ、これらはともに「月」に従っている。讀みについては、例えば『性自命出』では、『郭店楚墓竹簡』（文物出版社、一九九八年五月）の釋文は「達（?）」とし、未釋字扱いをしていたが、やはり「達」と讀んで間違いはないだろう。

また、「月」に従っていないものの、類似する字形として、『古文四聲韻』所引「古老子」の「達」、包山楚簡第一一九號簡の五字目、郭店楚簡『老子』第八號簡

の第十四字目、郭店楚簡『窮達以時』第十一號簡第十四字目・第十四號簡第六字目・第十五號簡第四字目、郭店楚簡『五行』第四十三號簡第十七字目、郭店楚簡『語叢一』第六十號簡第三字目に見られる。大部分の研究者はこれらの字をいずれも「達」と釋している。ちなみに、包山楚簡第一一九號簡の五字目については、湖北荊沙鐵路考古隊『包山楚簡』（文物出版社、一九九九年十月）では未釋字の扱いをされていたが、荊門市博物館編『郭店楚墓竹簡』（文物出版社、一九九八年五月）所收の『老子』甲本第八號簡注〔一八〕において、「達」字と同定している。また、郭店楚簡『老子』甲本第八號簡の第十四字目について、池田知久『郭店楚簡老子研究』は「造」に作っているが、廖名春『郭店楚簡老子校釋』（清華大學出版社、二〇〇三年六月）が指摘するとおり、「造」に作るのは誤りだろう。

また、趙平安「「達」字兩系說」（『中國文字』新二十七期、藝文印書館、二〇〇一年）は、金文や甲骨文も含め類似する字形を整理している。趙平安氏は「月」が「達」の聲符になっていると推測しているが、ここではなお不明であるとしておく。ちなみに、『漢字古音手冊』によると、「達」は定母月部、「月」は疑母魚部に屬しており、「月」が當該字の聲符になっている可能性は否定できない。また、『説文解字』辵部に、

達、行不相遇也。从辵牽聲。詩曰、挑兮達兮。𨔵、達或从大。或曰迭。

とある。また、『説文解字』羊部に、

𦍋、子羊也。从羊大聲。讀若達。𦍋、牽或省。

とあり、「𦍋、牽或省。」に對する段玉裁注は、

按此不當从入。當是从人。大、人也。故或从人。羊有仁義禮之德。故从人。

とあるように、「大」字を「人」字に書いた可能性がある。「曹峰」は當該字の右上部を「午」に従うものとしているが、はっきりしない。ここでは、當該字は「達」の訛變の一種とみなし、暫時「達」に作る。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「達」に作る。

「豊」は、「濮茅左」・「曹峰」・「季旭昇 3」は「豊」に作るが、「圖版」に従って「豊」に作る。「豊」は「豊」の異體字。同様の字形は、例えば包山楚簡第一二四號簡、郭店楚簡では多数看取でき、多くは「豊」と讀まれている。

「豊」は「濮茅左」・「曹峰」・「季旭昇 3」と同じく「禮」と讀爲する。「濮茅左」も指摘するとおり、『説文解字』豊部に、

豊、行禮之器也。从豆、象形。凡豊之屬皆从豊。讀與禮同。

とあり、郭店楚簡『老子』丙本第十號簡、郭店楚簡『五行』第二號簡など「豊」字を「禮」と讀む例は枚擧にいとまがない。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「禮」に作る。

「樂」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」は「樂」に作るが、「圖版」・「曹峰」に従って「樂」に作る。「樂」は「樂」の異體字。「樂」の異體字と考えられる字形として「樂」が擧げられるが、「樂」は郭店楚簡において『老子』甲本、丙本、『五行』、

『成之聞之』、『尊德義』、『性自命出』、『六德』、天星觀楚簡（藤壬生『楚系簡帛文字編』四五一～四五二頁、一一七二頁参照）に見え、「樂」と讀爲されている。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「樂」に作る。

「簾」は、「濮茅左」は「苳」に作るが、或いは「簾」・「簾」に作ることを示唆している。「曹峰」は「莠」に作り、「李銳」・「何琳儀」・「季旭昇3」は「簾」に作る。「林素清」は「濮茅左」の説に反対し、「其第二説分析字形爲竹下原或竹下淵（省水）、正確可從。」とし、「按：古文字竹・艸可通、淵・泉無別。」としている。しかし、「季旭昇3」の指摘する通り、「淵」と「泉」には明瞭な字形的區別がある。ここでは「圖版」に従って「簾」に作ることにする。また、「圖版」を見ると当該字上部は「竹」と「艸」の両方の字形的特徴を有しているが、ここでは暫時「竹」に従うものとする。

「簾」は、「原」もしくは「𪛗」の異體字と考える。『説文解字』𪛗部に、
𪛗、水泉本也。从𪛗出𪛗下。𪛗、篆文从泉。

とあり（「原」は「原」の本字。）、

……以小篆作原。知𪛗乃古文籀文也。後人以原代高平曰違之違。而別製源字爲本原之原。積非成是久矣。

とある。また、『汗簡』所引の「石經説文」の「泉」、『古文四聲韻』所引の「石經」の「泉」は、『説文解字』の「𪛗」字の篆文と酷似しており、「泉」・「𪛗」・「原」は互用・通假關係にあると言える。また、郭店楚簡『成之聞之』第十一號簡と第十四號簡の「藻」は「源」に讀爲されている。

「濮茅左」は当該字を「涇」と讀むが、或いは「原」・「源」と讀むことも示唆する。「李銳」・「何琳儀」は「原」と讀み、「季旭昇3」は「源」と讀む。ここでは「李銳」・「何琳儀」と同じく「原」と讀む。また、『禮記』孔子閒居篇は「原」、『孔子家語』論禮篇は「源」にそれぞれ作る。

【5】「己（以）至（致）五至、己（以）行三亡（無）、己（以）皇（橫）于天下。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

以致五至而行三無、以橫於天下。

に作る。『孔子家語』論禮篇も同じ。

「亡」は、「無」と讀む。「亡」と「無」の假借・互用の關係は傳世文獻・出土資料文獻中に多く見られる。『漢字古音手冊』によると、「亡」は明母陽部、「無」は明母魚部に屬す。聲母は同じであり、韻部は陰陽對轉の關係にあり、通假可能。

「亡」・「無」は主に動詞的用法として用いられており、兩字は密接な關係にある。大西克也「論“毋”“無”」（『古漢語研究』一九八九年第四期）を参照。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「無」に作る。

「于」は、「季旭昇 3」は「於」に作るが、「圖版」・「濮茅左」に従って「于」に作る。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「於」に作る。

「皇」は、「濮茅左」の指摘するとおり、同様の字形は欒書缶に看取できる。また、その他に包山楚簡二號墓第二二六號簡に二例、望山楚簡二號墓第四十五號簡、郭店楚簡『緇衣』第四十六號簡、曾侯乙墓樂鐘などに見える（何琳儀『戰國古文字典』六三〇頁など参照）。郭店楚簡『緇衣』第四十六號簡における同様の字形は張光裕主編『郭店楚簡研究第一卷文字編』（藝文印書館、一九九九年）や『郭店楚簡の思想史的研究』第四卷「緇衣」譯注では「皇」に作るが、これは誤り。「皇」字は『説文解字』之部に、

皇、艸木妄生也。从之在土上。讀若皇。

とあるが（段注校正本ではこれに「皇、古文。」という文章が續く）、當該字は明らかに「之」と「土」に従う字形ではない。ここでは當該字を「皇」に作ることにする。

「皇」は、「季旭昇 3」は如字で読み、「光大」の意とするが、やや根拠に缺ける。ここでは、「皇」は「横」と讀む。「皇」と「横」はともに匣母陽部に屬し、假借可能。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「横」に作る。

「横」は、「充」・「滿」と同じ意。また、「塞」とも同義。『禮記』孔子閒居篇の鄭玄注は、「横、充也。」とする。また、『禮記』祭義篇に、

曾子曰、夫孝、置之而塞乎天地、溥之而横乎四海。

とあり、『呂氏春秋』適音篇に、

夫音亦有適。太鉅則志蕩、以蕩聽鉅則耳不容、不容則横塞、横塞則振。

とあり、「横」と「塞」を並列し、同じような意で用いている。また、范耕研「呂氏春秋補注」（『江蘇國學圖書館年刊』第六期、一九三三年）は、上で挙げた『禮記』孔子閒居篇の鄭玄注を引用し、「横塞猶言充塞。」としている。また、「塞」は、『禮記』孔子閒居篇の鄭玄注に「塞、滿也。」とあり、『孟子』公孫丑上篇に、

曰、難言也。其為氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間。

とあり、趙岐注に

養之以義、不以邪事干害之、則可使滋蔓、塞滿天地之間、布旅德教、無窮極也。

とある。また、『玉篇』土部に、

塞、蘇代切。隔也。蘇得切。實也。滿也。蔽也。

とあり、「塞」も「横」とほぼ同じ意味であると考ええる。

【6】「四方又（有）敗（敗）、必先誓（知）之。元（此）〔之〕胃（謂）民之父母矣。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

四方有敗、必先知之。此之謂民之父母矣。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

四方有敗、必先知之。此之謂民之父母。

に作る。

「敗」は、「曹峰」は「敗」に作り、「季旭昇3」は「敗」に作るが、「圖版」・「濮茅左」に従って「敗」に作る。ただし、「圖版」を詳細に見ると、当該字が「支」に従っているかははっきりしない。しばらく「敗」に作っておく。「敗」は、「敗」の籀文である「𣦵」の異體字または省字。「𣦵」は、『説文解字』支部に、

𣦵、毀也。从支貝。敗賊皆从貝、會意。𣦵、籀文敗。从𣦵。
とあり、「敗」の籀文とされている。当該字と同様の字形は包山楚簡、九店楚簡、郭店楚簡、鄂君啓舟節、曾侯乙墓竹簡などに見られ、多くは「敗」と讀まれている。

「敗」は、「災い」の意。『禮記』孔子閒居篇の鄭玄注は、「敗、謂禍哉也。」とある。

「𣦵」は、「濮茅左」は「𣦵」に作り、「曹峰」・「季旭昇3」は「智」に作るが、「圖版」に従って「𣦵」に作る。「𣦵」は「𣦵」の異體字と考える。同様の字形は金文、包山楚簡、郭店楚簡に多く見られ、「知」または「智」と讀まれている。『説文解字』白部に、

𣦵、識詞也。从白从亏从知。𣦵、古文𣦵。
とあり、当該字と『説文解字』の「𣦵」は構成要素も近似している。ここでは当該字を「知」と讀爲する。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「知」に作る。

「元(此) [之] 胃 (謂)」について。「之」は、「濮茅左」・「曹峰」に従って「之」字を補うこととする。「季旭昇3」に指摘するとおり、先秦の文獻中に「其之謂…」という表現は見あたらない。よって、「濮茅左」の説くように「元(其) [之] 胃 (謂)」讀むとは考えがたい。そこで、「季旭昇3」は「元(其) [可] 胃 (謂)」と讀み、「可」を補っている。しかし、本篇第五號簡に「此之胃 (謂) 五至。」とあり、第七號簡に「此之胃 (謂) 三亡(無)。」とあることから考えて、「元」は「此」の錯字と判断する。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「此之謂」に作る。

第 二 章

本 文

子晳(夏)曰、「敢問(問)、可(何)胃(謂)五至。」【1】孔 𠄎(孔子)曰、「五至虎(乎)。勿(物)之所至者、忠(志)亦至安(焉)、【2】忠(志)之(以上第三號簡) [所] 至者、豊(禮)亦至安(焉)、【3】豊(禮)之所至者、縗(樂)亦至安(焉)、【4】縗(樂)之所至者、愍(哀)亦至安(焉)。」【5】愍(哀)縗(樂)相生、君子(以上第四號簡)已

(以) 正。此之胃 (謂) 五至。」【6】

訓 讀

子夏(夏)曰わく、「敢えて竊(問) う、可(何) をか五至と胃(謂) う。」孔 ㊦(孔子)曰わく、「五至か。勿(物) の至る所は、忠(志) も亦た至り、忠(志) の至る〔所〕は、豊(禮) も亦た至り、豊(禮) の至る所は、縗(樂) も亦た至り、縗(樂) の至る所は、慙(哀) も亦た至る。慙(哀) と縗(樂) は相い生じ、君子は己(以) って正しくす。此れを之れ五至と胃(謂) う。」

口語譯

子夏は言う、「あえてお尋ねします。どのようなことを五至と言うのですか。」孔子は言う、「五至のことか。物が極まるところは志もまた極まり、志が極まるところは禮もまた極まり、禮が極まるところは樂(ガク) もまた極まり、樂(ガク) が極まる〔ところ〕は哀もまた極まる。哀と樂(ラク) は相互に生じ、君子はそれによって(自分自身を) 正しくするのである。このようなことが五至と言うのです。」

注 釋

【1】「子夏(夏)曰、敢竊(問)、可(何) 胃(謂) 五至虎(乎)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

子夏曰、民之父母、既得而聞之矣。敢問何謂五至。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

子夏曰、敢問、何謂五至。

に作る。

【2】「孔 ㊦(孔子)曰、五至虎(乎)。勿(物) 之所至者、忠(志) 亦至安(焉)」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

孔子曰、志之所至、詩亦至焉

に作る。『孔子家語』論禮篇も同じ。

「勿」は、「物」と讀む。「濮茅左」は當該字を「勿」、疑「志」之誤寫、但「勿」讀作「物」、似亦通。」とするが、結局は當該字を「志」と讀んでいる。また、「龐樸」・「龐樸4」も當該字を「志」と讀んでいる。「季旭昇2」・「季旭昇3」・「李天虹」は「濮茅左」の「志」之誤寫。」とする説に反対し、當該字を「物」と讀む。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「志」に作る。ここでは、「季旭昇2」・「季旭昇3」・「李天虹」と同様に當該字を「物」と讀爲する。「勿」を「物」と讀む例は出土資料文献中に多く見られ、例えば郭店楚簡『老子』甲本第三十五號簡に、

勿慙(壯) 則老、是胃(謂) 不道。

とあり、ここと對應する『老子』(王弼本)第三十章は、「勿」を「物」に作る。

「𠄎」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」は「志」に作るが、「圖版」に従って「𠄎」に作る。「𠄎」は、「濮茅左」・「龐樸」・「龐樸 4」は當該字を「詩」と讀み、「季旭昇 2」・「季旭昇 3」・「李天虹」は當該字を如字の「志」で讀む。この「志」字を「詩」と讀むことは音韻上、全く問題はない(「志」は章母之部、「詩」は書母之部。聲母は共に舌上音、韻部は同じで通假可能)。確かに、『民之父母』第七～八號簡の「可(何)志是遲(昵)。」は『禮記』孔子閒居篇は「何詩近之」と對應しており、この「志」字も「詩」と讀むことができそうある。

しかし、「物」に反應して「志」もそれに應じる、という考えは郭店楚簡『性自命出』・上海博楚簡『性情論』などにも見ることができる。例えば郭店楚簡『性自命出』第一～二號簡には、

凡人唯(雖)又(有)眚(性)、心亡(無)奠志。𠄎(待)勿(物)而句(後)𠄎(作)、而𠄎(待)兌句(後)行、𠄎(待)習而句(後)奠。

とあり、『禮記』樂記篇に、

凡音之起、由人心生也。人心之動、物使之然也。感於物而動、故形於聲。

とあり、同じく『禮記』樂記篇に、

夫民有血氣心知之性、而無哀樂喜怒之常、應感起物而動、然後心術形焉。

とある。ここでは「季旭昇 2」・「季旭昇 3」に従って當該字を如字で讀む。

「安」は、「焉」と讀爲する。「安」の異體字または省字。「安」を「焉」と讀む例は、例えば郭店楚簡『老子』第十九號簡に見える。荆門市博物館編『郭店楚墓竹簡』(文物出版社、一九九八年五月)【注釈】[四九]を参照。

また、文末の助辭として「安」字を用い「焉」と讀まれている例は郭店楚簡中に幾つか見られ、郭店楚簡『性自命出』第二十一號簡に「是已敬安。」とあり、この「安」を文末の語氣詞「焉」との假借字と解釋されている。例えば、池田知久監修『郭店楚簡の研究(四)』(大東文化大學郭店楚簡研究班編、二〇〇二年十月)注釋(6)を参照。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「焉」に作る。

【3】「𠄎(志)之〔所〕至者、豊(禮)亦至安(焉)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

詩之所至、禮亦至焉、

に作る。『孔子家語』論禮篇も同じ。

「所」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」に指摘するとおり「所」字を補う。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「所」に作る。

【4】「豊(禮)之所至者、綰(樂)亦至安(焉)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

禮之所至、樂亦至焉
に作る。『孔子家語』論禮篇も同じ。

この「樂」は、「ガク」と讀む。『禮記』孔子閒居篇におけるこの「樂」を「ガク」と讀むか「ラク」と讀むかは『民之父母』の發見以前から問題となっている。つまり、本篇で言うところの、

綫(樂)亦至安(焉)、綫(樂)之所至者、愍(哀)亦至安(焉)。愍(哀)綫(樂)相生、君子已(以)正。

の下線部をそれぞれどう讀むかということである。例えば『禮記』孔子閒居篇の鄭玄注は、「哀樂音洛、舊音岳。」とし、陸德明『經典釋文』も同じ解釋をする(「音洛、舊音岳。」。)また、孔穎達疏は、

禮之所至、樂亦至焉者、既禮能至極於民、必爲民之所樂、故樂亦至極於民焉。樂之所至、哀亦至焉者、君既與民同其歡樂、若民有禍害、則能悲哀憂恤、至極於下、故云、哀亦至焉。哀樂相生者、言哀生於樂、故上云、樂之所至、哀亦至焉。凡物先生而後死、故先樂而後哀、哀極則生於樂、是亦樂生於哀、故云、哀樂相生。此言哀之與樂、及志與詩禮、凡此五者、皆與民共之。

としている。下線部の文意から考えて、孔穎達は經文の三字の「樂」を「ラク」と讀んでいると考えてよいだろう。また、『禮記集說』を通觀しても、ほとんどの學者がその文意から見て、みな鄭玄や孔穎達と同じく「ラク」と讀んでいると考えられる。しかし、この説に反對するのは清代擬古派の姚際恆である。姚際恆は『禮記通論』の中で、

或樂亦至焉之樂、音岳。樂之所至之樂、音洛。欲取哀至之義、忽以樂(岳)字脱換作樂(洛)。字其奇。(註與疏以三樂字皆音洛、則禮樂不相接。陳氏集說上二樂字皆音岳、則樂哀又不相接也。)詩禮樂屬經、哀屬人情、又何得並詩禮樂爲一至乎。至於哀樂相生、又別一義、竟與民之父母章旨全不照顧矣。

と指摘し(括弧内は注)、從來のその讀み方に疑義を呈している。ここでは、「季旭昇2」の説に従って、

綫(樂=ガク)亦至安(焉)、綫(樂=ガク)之所至者、愍(哀)亦至安(焉)。愍(哀)綫(樂=ラク)相生、君子已(以)正。

と讀む。「樂(ガク)」が極まると「哀」も極まる」という明確な表現は見つからないが、『禮記』樂記篇に、

王者功成作樂、治定制禮。其功大者、其樂備、其治辯者、其禮具。干戚之舞、非備樂也。孰亨而祀、非達禮也。五帝殊時、不相沿樂、三王異世、不相襲禮。樂極則憂、禮粗則偏矣。及夫敦樂而無憂、禮備而不偏者、其唯大聖乎。

とあるのがやや近い表現か。

また、「愍(哀)綫(樂)相生」の「綫(樂)」は、「ラク」と讀む。「樂(ラク)」と「哀」を並べ用いる例は傳世文獻に極めて多く見られる。

【5】「綫(樂)之所至者、愍(哀)亦至安(焉)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、
樂之所至、哀亦至焉、
に作る。『孔子家語』論禮篇も同じ。

この「緇（樂）」は、「ガク」と讀む。本稿本章【4】参照。

「愬」は、「哀」の異體字または通假字。同様の字形は郭店楚簡『尊徳義』第三十一號簡にみえ、「哀」と讀爲されている。また、「濮茅左」の指摘するとおり、『説文通訓定聲』履部に「哀、閔也。从口、衣聲。字亦作懷。」とある。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「哀」に作る。

【6】「愬(哀)緇(樂)相生、君子己(以)正。此之胃(謂)五至。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、
哀樂相生。是故正明目而視之、不可得而見也。傾耳而聽之、不可得而聞也。志氣塞乎天地。此之謂五至。
に作り、『孔子家語』論禮篇は、
詩禮相成、哀樂相生。是以正明目而視之、不可得而見。傾耳而聽之、不可得而聞。志氣塞于天地行之、充于四海。此之謂五至矣。
に作る。

この「緇（樂）」は、「ラク」と讀む。本稿本章【4】参照。

第 三 章

本 文

子晷(夏)曰、「五至既窺(聞)之矣。敢窺(問)、可(何)胃(謂)三亡(無)。」【1】孔 Ⅱ(孔子)曰、「三亡(無)虎(乎)。亡(無)哩(聖(聲))之緇(樂)、【2】亡(無)臚(體)(以上第五號簡)[之]豊(禮)、【3】亡(無)備(服)之翬(喪)、君子己(以)此皇(横)于天下。【4】奚(傾)耳而聖(聽)之、不可見(得)而窺(聞)也。【5】明目而視之、不可(以上第六號簡)見(得)而視(見)也。【6】而見(得)既(氣)塞(塞)於四海(海)矣。此之胃(謂)三亡(無)。」【7】

訓 讀

子晷(夏)曰わく、「五至は既にこれを窺(聞)く。敢えて窺(問)う、可(何)をか三亡(無)と胃(謂)う。」孔 Ⅱ(孔子)曰わく、三亡(無)か。亡(無)哩(聖(聲))の緇(樂)、亡(無)臚(體)[の]豊(禮)、亡(無)備(服)の翬(喪)、君子此れを己(以)って天下に皇(横)う。耳を奚(傾)けてこれを聖(聽)けども、見(得)て窺(聞)く

可からざるなり。目を明らかにしてこれを視れども、曷(得)て視(見)る可からざるなり。而れども既(氣)四溥(海)を壅(塞)ぐを曷(得)たり。此れを之れ三亡(無)と胃(謂)う。」

口語譯

子夏は言う、「五至のことはもうお聞きしました。では、あえてお尋ねします。どのようなことを三無と言うのでしょうか。」孔子は言う、「三無のことか。音のない音楽、形〔の〕ない禮、(喪に)服さない喪、君子はこの三つを用いて(君子の心を)天下に満たします。(その三つは)耳を傾けて聴いても聞くことができなく、目をこらして凝視しても見るができない。しかし、氣は四海を満たすことができる。このようなことを三無と言うのです。」

注 釋

【1】「子晷(夏)曰、五至既窳(聞)之矣。敢窳(問)、可(何)胃(謂)三亡(無)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

子夏曰、五至既得而聞之矣。敢問、何謂三無。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

子夏曰、敢問、何謂三無。

に作る。

「既」は、「濮茅左」は「既」に作るが、「圖版」に従って「既」に作る。

【2】「孔 丱(孔子)曰、三亡(無)虎(乎)。亡(無)厖(聖(聲))之縵(樂)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

孔子曰、無聲之樂、

に作る。『孔子家語』論禮篇も同じ。

「厖」は、「濮茅左」・「季旭昇3」は「聖」に作るが、「圖版」を詳細に見ると、當該字は「耳」に従っていない。この部分は「戸」の字形に近似している。ここでは、「圖版」に従って「厖」に作る。「厖」は、「聖」の錯字。「戸」は「耳」と字形が近く(任意に『戰國古文字典』「戸」七七八頁、「所」九二六頁などを参照)、これと誤ったものとする。

「厖」は、「聲」と讀む。「聖」と「聲」はともに書母耕部に屬し假借可能。「聖」と「聲」の互用・通假例は、『汗簡』所引の『華岳碑』の「聖」字に、

聖、華岳碑亦作聲。

とある。また、出土資料文献中で「聖」と「聲」の通假例は多く、例えば郭店楚簡『老子』甲本第十六號簡に、

……、音聖之相和也、先後之相墮（隨）也。

とあり、これに對應する通行本『老子』各種、馬王堆『老子』甲・乙本は、いずれも「聖」を「聲」に作る（池田知久『郭店楚簡老子研究』参照）。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「聲」に作る。

【3】「亡（無）體（體）〔之〕豊（禮）」について。

『禮記』孔子閒居篇は「無體之禮」に作る。『孔子家語』論禮篇も同じ。

「體」は、「濮茅左」・「季旭昇3」は「體」に作るが、「圖版」に従って「豊」に作る。「豊」は「體」の異體字または省字。同様の字形は郭店楚簡『窮達以時』第十號簡に見える。また、類似する字形として「體」が挙げられるが、「體」は睡虎地秦墓竹簡『日書』乙本に四例、『法律答問』第七十九號簡に一例あり、馬王堆帛書の中にも数多く見られる。例えば、馬王堆帛書『周易』二三子問篇第三十四行に、

陰陽合德而剛柔有體。

とある。これは『周易』繫辭下傳に同様の文言が見られ、「體」を「體」に作っている。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「體」に作る。

「之」は、「濮茅左」に従って「之」を補う。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「之」に作る。

【4】「亡（無）備（服）之鞵（喪）、君子曰（以）此皇（横）于天下。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、「無服之喪」に作る。『孔子家語』論禮篇も同じ。

「備」は、「濮茅左」・「季旭昇3」は「備」に作るが、ここでは「備」に作る。「備」は「服」の假借字。同様の字形は出土資料文献中に多く見られるが、「濮茅左」が指摘するとおり、上海博楚簡『緇衣』第九號簡の「衣備」（「濮茅左」は「備」字に作っているが、「備」字に改めた）は、それと對應すると考えられる郭店楚簡『緇衣』第十六號簡も「衣備」に作り、『禮記』緇衣篇は「衣服」に作っている。傳世文献中の「備」と「服」の互用・通假の例は、『韓詩外傳』卷八に、

此是黄帝乃服黄衣、載黄冕、致齋于宮。

とあり、『說苑』辨物篇は、

於是乃備黄冕、帶黄紳、齋於中宮。

とある（『古字通假會典』四四〇頁参照）。また、「備」と「服」の通假関係については李承律氏の郭店楚簡『緇衣』第九章（第十六號簡～十七號簡）譯注（『郭店楚簡の思想史的研究』第三卷、東京大學郭店楚簡研究會編、二〇〇〇年一月）にも詳しい。

「鞵」は、「季旭昇3」は「喪」に作るが「濮茅左」に従って「鞵」に作る。「鞵」

は、「喪」の異體字と考える。李孝定『甲骨文字集釋』第二で指摘するとおり、「喪」は異體字が甚だ多い。類似する字形は郭店楚簡『老子』丙本第八號簡・第九號簡・第十號簡、『性自命出』第六十七號簡、『語叢一』第九十八號簡、『語叢三』第三十五號簡、上海博楚簡『容成氏』第四十一號簡にも見られ、これらは共通して「九」と一～四つの「口」に従っている。なお、『容成氏』第四十一號簡の字形は、當該字と同様に「木」に従っている。また、これら一様に「喪」と讀まれている。李孝定『甲骨文字集釋』第二、白玉崢「契文學例校讀」（『中國文字』第八卷）で指摘するとおり、甲骨文や金文の「喪」字は「𣎵（桑）」に従う形が多いが、當該字の構成要素となっている「九」や「木」は、「𣎵（桑）」から分化したものであるかもしれない。『漢字古音手冊』によると「喪」と「桑」はともに心母陽部に屬し通假可能。當該字の「九」は「桑」の省聲であろうか。なお、以上は『古文字詁林』第二卷一八五頁を参照した。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「喪」に作る。

「亡（無）備（服）之翼（喪）」は、「季旭昇 3」は「沒有親等服制的喪禮」と現代語譯する。また、「服」を「服装」の意と考えることも可能である。しかし、ここでは「（喪に）服することなきの喪」と譯す。「季旭昇 3」の様に、「親等服制」と釋すとその對象が限定されるので、この説は採らない。まず、ここで擧げられている「三無」の「無聲之樂」・「無體之禮」は、「樂」・「禮」の根本的要素である「聲」・「體」を否定している。そこで「無服之喪」を考えるに当たって、「親等服制」や「服装」の意では「喪」の根本的要素となり得ないと考える。

「無聲之樂」「無體之禮」「無服之喪」について。これらについて説明する傳世文獻は、『說苑』脩文篇に、

孔子曰、無體之禮、敬也。無服之喪、憂也。無聲之樂、懼也。不言而信、不動而威、不施而仁、志也。鍾鼓之聲、怒而擊之則武。憂而擊之則悲。喜而擊之則樂。其志變、其聲亦變。其志誠通乎金石而況人乎。

とある（『孔子家語』六本篇もほぼ同様の文を引く）。しかし、本篇との関係は不明。

【5】「奚（傾）耳而聖（聽）之、不可得（得）而窺（聞）也。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

傾耳而聽之、不可得而聞也。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

傾耳而聽之、不可得而聞。

に作る。しかし、通行本のこの文章はいずれも「五至」の説明中にある。

「奚耳」について。「奚」は、「濮茅左」は「繫」と讀むが、「劉樂賢」・「季旭昇」・「何琳儀」・「孟蓬生」・「黃德寬」・「季旭昇 3」は「傾」と讀む。ここでは、當該字を

「傾」と讀む。『漢字古音手冊』によると、「奚」は匣母支部、「繫」は見母錫部、「傾」は溪母耕部にそれぞれ屬す。いずれも聲母・韻部ともに近く、通假は可能である。「林素清」は「奚」について、「如果有寫錯或形訛的可能、似不妨改釋作「𦏧」。「𦏧耳而聽」即「側耳而聽」、與「傾耳而聽」的意思相同。」とするが、牽強付會であるのでこの説は採らない。「濮茅左」の指摘するとおり、「傾耳」という句の用例は『漢書』賈山傳に「使天下之人載目而視、傾耳而聽。」とある。この他にも、『史記』秦始皇本紀に、

故使天下之士、傾耳而聽、重足而立、拑口而不言。

とあり、『史記』淮陰侯列傳に、

名聞海内、威震天下、農夫莫不輟耕釋耒、傾耳以待命者。

とあり、『史記』淮南衡山列傳に、

天下熬然若焦、民皆引領而望、傾耳而聽、悲號仰天、……天下響應。

などがある。それに對し、「繫耳」という句の用例はあまりなく、黄帝内經『靈樞』經脉第十に、

其支者、從臚中上出缺盆、上項、繫耳後直上、出耳上角、以屈下頰至頤。

とあるが、この「繫」字は『脈經』・『甲乙經』はいずれも「俠」に作り、そもそも「繫」と讀むかどうかさえ疑わしい。また、『民之父母』の「奚耳」を假に「繫耳」や「俠耳」と讀んだとしても、ここでは意味が通じない。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「傾」に作る。

「聖」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」に従って「聽」と讀む。「聖」字を「聽」と讀む例は、郭店楚簡『老子』丙本第五號簡、『性自命出』第二十四號簡第十九字目にある。例えば、郭店楚簡『老子』丙本第五號簡に、

視之不足見、聖之不足聞（聞）、而不可既也。

とあり、これと對應すると考えられる王弼本『老子』第十四章は、

視之不見、名曰夷。聽之不聞、名曰希。搏之不得、名曰微。

とある。『漢字古音手冊』によると、「聖」は書母耕部、「聽」は透母耕部に屬す。聲母はともに舌音、韻部はともに同じであり、通假可能。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「聽」に作る。

「𦏧」は、「得」の異體字または省字。「濮茅左」と同様に「得」と讀む。同様の字形は包山楚簡、望山楚簡、郭店楚簡、上海博楚簡、楚帛書、古璽、金文中に幅廣く見られる。例えば、郭店楚簡『老子』甲本第二十八號簡に、

不可𦏧天貴、亦可不可𦏧天𦏧（賤）。

とあり、各種通行本『老子』、馬王堆帛書『老子』甲・乙本は「𦏧」をそれぞれ「得」に作る。池田知久『郭店楚簡老子研究』參照（東京大學文學部中國思想文化學研究室、一九九九年十一月）。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「得」に作る。

【6】「明目而視之、不可𦏧（得）而視（見）也。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

是故正明目而視之、不可得而見也。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

是以正明目而視之、不可得而見。

に作る。しかし、通行本のこの文章はいずれも「五至」の説明中にある。

「明目而視之、不可見(得)而視也。」における二つの「視」字について。「視」は、「濮茅左」は「見」に作るが、「季旭昇 3」に従って「視」に作る。「季旭昇 3」も引用する裘錫圭「甲骨文中の視與見」(『甲骨文發現一百周年學術檢討會論文集』、臺灣師範大學文系、一九九八年五月)によると、甲骨文には「視」と「見」の書き方に區別があると指摘している。この裘錫圭氏の論文に照らし合わせて、兩字は暫時「視」に作ることにする。

「季旭昇 3」は兩字とも如字で讀むが、「安徽」・「黃德寬」の指摘するとおり『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇と同じく、第一字目を「視」、第二字目を「見」とそれぞれ讀むべきである。この文章は、前文の「奚(傾)耳而聖(聽)之、不可見(得)而窺(聞)也。」を承けている。前文の「聽」・「聞」の關係は、英語の「listen」・「hear」の關係と同じであり、前者は後者よりも主體性が高い動詞である。この文の「視」・「見」は「watch」・「look」の關係であり、前文と同様に前者は後者よりも主體性の高い動詞を用いていると考える。

裘錫圭氏によれば、本來「視」と「見」の字形に區別があつたようであるが、曾侯乙墓竹簡では「視」と「見」の字形的區別に動搖が見られ、郭店楚簡にもそのような動搖が見られることを指摘している。また、例えば郭店楚簡『緇衣』第十九號簡に、

君迪(陳)員(云)、未見聖、如亓弗克見、我既見、我弗迪聖。

とあり、三つの「見」字が看取できるが、上海博楚簡『緇衣』は三字とも「視」に作り、『禮記』緇衣編は三字とも「見」に作る。また、郭店楚簡『緇衣』第四十號簡に、

子曰、句(苟)又(有)車、必見𠄎(其)𠄎、句(苟)又(有)衣、必見𠄎(其)𠄎(蔽)。

とあり、この二つの「見」は、上海博楚簡『緇衣』の第一字目は「視」に作り(二字目は殘缺)、通行本『禮記』緇衣篇は二字とも「見」に作っている。ここから、本篇でも「視」と「見」の字形的區別はすでに明確ではなかったと言える。

【7】「而見(得)既(氣)壅(塞)於四溥(海)矣。此之胃(謂)三亡(無)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

志氣塞乎天地。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

志氣塞于天地、行之充于四海。

に作る。しかし、通行本のこの文章はいずれも「五至」の説明中にある。

「既」は、「氣」の異體字である「𩇛」または「𩇛」の省字。または「氣」の通假字。「濮茅左」の指摘する通り、楚系文字において「𩇛」は「氣」と讀まれる。「𩇛」は包山楚簡、郭店楚簡、楚帛書、『汗簡』などに見え、例えば郭店楚簡『老子』甲本第三十五號簡に、

心𩇛（使）𩇛曰𩇛（強）。

とあり、各種通行本『老子』、馬王堆帛書『老子』甲・乙本はともに「𩇛」を「氣」に作る（池田知久『郭店楚簡老子研究』参照）。また、『説文解字』米部に、

𩇛、饋客芻米也。从米、气聲。春秋傳曰、齊人來氣諸侯。𩇛、氣或从既。𩇛、氣或从食。

とあり、「氣」の或體として「𩇛」と「𩇛」が挙げられている。また、「𩇛、氣或从既。」に對する段玉裁注に「既、聲也。」とあり、「既」字は「氣」と通假可能。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「氣」に作る。

「𩇛既」について。「𩇛」は、「得」・「徳」と讀むことができる。また、「既」は「氣」とも讀むことができるため、合計四通りの讀み方の説が出されている。

「濮茅左」は、「得氣」と讀み、特に説明はしていない。「張豐乾」も「得氣」と讀む。

「劉信芳」は、「徳氣」と讀む。「志氣」の鄭玄注に「志謂恩意」とあり（「劉信芳」は「恩義」としているが、「季旭昇3」も指摘するとおり、「恩意」の誤りだろう。以下は「恩意」に直す）、この「恩意」は「徳」に当たるとしている。

「何琳儀」は、「得」が「志」と通假可能であると主張し、「志氣」と讀む。

「陳劍」は、當該字の「既」は「𩇛（氣）」字とは異なっているとし、當該字は「氣」と釋すことはできないとし、「徳既」と讀む。

「季旭昇3」はこれらの説を批判し、「得既」と讀み、「得既」は「能夠已經」の意とする。

譯者は、以下に挙げる「張豐乾」の「得氣」と讀むべきと主張する説が最も説得力があると考え、これを支持する。「張豐乾」は、

君子“横于天下”、卻是豎起了耳朵也聽不見、擦亮了眼睛也看不到、認真的看和努力的聽都“不可得”。然而、君子“得”了什麼呢？這應該是下文順理成章要回答的問題。由此可見、“而”字在文中是一個表示轉折的連詞、“得”字無論是在字形上還是在字義上、都和上文的兩個“得”是一樣的、不必釋爲“徳”。而下文的“既”就成了“得”的物件、不能再釋爲“已”、而有理由被看作是省去了底下的“火”、可以釋爲“氣”。也就是說、《民之父母》第7簡該句可以被釋爲“而得氣塞于四海矣”。

としているが、その通りであろう。

では、「劉信芳」の「徳氣」と讀む説を考える。上述した通り、「劉信芳」は『禮記』孔子閒居篇の「志氣」における鄭玄注に「志謂恩意」とあると指摘している。しかし、この鄭玄注は「志之所至、詩亦至焉」に對する注であることを指摘してお

く。また、「恩意」を「徳」と考えるのは、やや牽強付會の感がある。姚際恆『禮記通論』は、經文の「志之所至、詩亦至焉」に對して

鄭氏以其不可通。故曰、凡言至者、至于民也。志謂恩意也。言君恩意至於民、則其詩亦至也。以志爲恩意、曲解顯然、則作者之意亦豈嘗如是。

と批判しているが、その通りであろう。

また、「何琳儀」は「志氣」と讀んでいる。しかし、姚際恆『禮記通論』では、志氣塞乎天地、襲孟子、其爲氣也、則塞乎天地之間。然氣可言塞、志不可塞也。と指摘しているが、その通りであろう。よって、ここでは「濮茅左」・「張豐乾」と同じく、「得氣」と讀むこととする。

「塞」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」は「塞」に作るが、「圖版」を詳細にみると當該字は「玉」に従っている。ここでは、當該字を「塞」に作る。「塞」は「塞」の異體字。類似する字形に「寶」が擧げられるが、「寶」は郭店楚簡『老子』甲本第二十七號簡、望山一號墓楚簡第十一號簡、第十二號簡、第五十九號簡、第六十三號簡に見える。例えば、郭店楚簡『老子』甲本第二十七號簡の「寶」は、各種通行本『老子』、馬王堆帛書『老子』甲・乙本はそれぞれ「塞」に作る。

「塞」は、「充」・「滿」と同義。また、「横」とも同義。本稿第一章【5】参照。

「海」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」は「海」に作る。しばらく「濮茅左」・「季旭昇 3」に従って「海」に作る。本稿第一章【2】の「母」でも指摘した通り、當該字も「母」と「母」の雙方の字形的特徴を有している。「海」は包山楚簡第一四七號簡第十字目（張光裕『包山楚簡文字編』は「泯」に作るが、「海」に作るのが正しい）、郭店楚簡『老子』甲本第二號簡・第二十號簡、『窮達以時』第十號簡、『性自命出』第九號簡などに見え、「海」と讀爲されている。その考証は、池田知久監修『郭店楚簡の研究』第四卷所收の『性自命出』譯注九十四頁（大東文化大學郭店楚簡研究班編、二〇〇二年十月三十一日）に詳しい。「母」と「母」の通假關係は既に説明した通り。よって、當該字を「海」と讀爲する。

「君子已(以)此皇(横)于天下。奚(傾)耳而聖(聽)之、不可見(得)而聞(聞)也。明目而視之、不可見(得)而視(見)也。而見(得)既(氣)塞(塞)於四海(海)矣。」が、「三亡(無)」の説明の中にあることについて。

「奚(傾)耳而……四海(海)矣。」は、『禮記』孔子閒居篇において、

是故正明目而視之、不可得而見也。傾耳而聽之、不可得而聞也。志氣塞乎天地此之謂五至。

とあり、「五至」を説明する中に組み込まれている（『孔子家語』論禮篇も文體にやや違いがあるものの、『禮記』孔子閒居篇と同様に五至の説明中にある）。本篇で言うならば、第四號簡の「惻(哀)縗(樂)相生」の後にあることになる。「陳劍」は、『禮記』孔子閒居篇と『孔子家語』論禮篇は錯簡によってこのような順序になったのだと指摘する。

「陳劍」は、「正明目而視之、不可得而見也。傾耳而聽之、不可得而聞也。」とはそれぞれ、「正明目而視之、不可得而見也。」が「無體之禮」「無服之喪」と、「傾耳而聽之、不可得而聞也。」が「無聲之樂」とそれぞれ對應しているとする。しかし、この説が正しいかどうかはなお不明であるとしておく。

第四章

本文

子夏(夏)曰、「亡(無)聖(聲)之綽(樂)、亡(無)豊(體)之豊(禮)、亡(無)備(服)之罫(喪)、可(何)岌(詩)(以上第七號簡)是遯(昵)。」【1】孔 ㄹ (孔子)曰、「善已、商也。廼(將)可季(教)菽(詩)矣。【2】『塋(成)王不敢康、迺(夙)夜言(基)命(命)又(宥)寤(密)。』、亡(無)聖(聲)之綽(樂)。【3】『梟(威)我(儀)巨 ㄹ (逮逮)、(以上第八號簡)〔不可選也。〕無體之禮也。『凡民有喪、匍匐救之。』無服之菽(喪)也。」【4】子夏(夏)曰、「元(其)已設(悟)也。敗(散(美))矣。宏(宏)矣。大矣。【5】秉(盡)(以上第九號簡)〔於此而已乎。〕孔 ㄹ (孔子)曰、「何爲其然。猶有五起焉。子夏曰、〕「可(得)而(聞)菽(歟)。」【6】

訓讀

子夏(夏)曰わく、「亡(無)聖(聲)の綽(樂)、亡(無)豊(體)の豊(禮)、亡(無)備(服)の罫(喪)、可(何)の岌(詩)か是れ遯(昵)し。」孔 ㄹ (孔子)曰わく、「善きかな、商や。廼(將)に菽(詩)を季(教)ふ可からんとす。『塋(成)王敢えて康んぜず、迺(夙)夜命(命)に言(基)づき又(宥)寤(密)す。』とは、亡(無)聖(聲)の綽(樂)なり。『梟(威)我(儀)巨 ㄹ (逮逮)、〔選うべからざるなり。』とは、無體の禮なり。『凡そ民喪有り、匍匐してこれを救う。』とは、無服の菽(喪)なり。」子夏(夏)曰わく、「元(其)れ已に設(悟)れり。敗(散(美))なり。宏(宏)なり。大なり。〔此に〕秉(盡)くる〔のみか。〕孔子曰わく、「何爲れぞ其れ然らん。猶ほ五起有り。」子夏曰わく、「(得)て(聞)く可きか。」

口語譯

子夏は言う、「音のない音楽、形のない禮、(喪に)服さない喪、とはどの詩がこの様な考えに近いでしょうか。」孔子は言う、「素晴らしい。商よ、ちょうど詩を教えてもいいだろう。『成王はあえて休まず、昼夜を問わず天命に基づいて、心寛く静かにしている。』とは、音のない音楽のことである。『振る舞いは安らかであり、〔数えることができない。』とは、形のない禮である。『民に喪があれば、這いつくばってこれを救う。』とは、(喪に)服さない喪である。」子夏は言う、「それでもうはつきりとなりました。美しく、広く、大きなものですね。〔これだけで〕全て盡きていますか。」「孔子は言う、「どうしてそれでよいと言えようか。さらに五起がある。」

子夏は言う、)「お聞きしてもよろしいですか。」

注 釋

【1】「子晷(夏)曰、亡(無)聖(聲)之𨔵(樂)、亡(無)臚(體)之豐(禮)、亡(無)備(服)之𨔵(喪)、可(何)𨔵(詩)是暹(昵)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

子夏曰、三無既得略而聞之矣。敢問、何詩近之。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

子夏曰、敢問、三無何詩近之。

に作る。

「暹」は、「濮茅左」は「𨔵」字に作り、上海博楚簡中の「𨔵」は「𨔵」と書かれており、「仲尼」という語の「尼」は「尼」と書かれていることを指摘している。「季旭昇3」は「𨔵」に作る。類似する字形は、郭店楚簡『尊徳義』第十七號簡、上海博楚簡『從政』甲篇第十三號簡、『容成氏』第十九號簡に見える。上海博楚簡『從政』甲篇第十三號簡の文字に對し張光裕氏は「𨔵」を「耳」の訛變と解釋し、「𨔵」かまたは「𨔵」と楷書化しており(『上海博物館藏戰國楚竹書』二二六・二二七頁參照)、「季旭昇」・「季旭昇3」がこれを支持している。また、「黃徳寬」は當該字の「𨔵」の部分「𨔵」とし、「匿」の省字と考える。ここでは、「安徽」・「黃徳寬」の説を參看し、「暹」に作る。張光裕氏による「耳」の字形變化の説明はやや根拠に缺け、牽強付會の感がある。

「暹」は、「濮茅左」・「季旭昇」・「季旭昇3」は「𨔵」と讀むが、ここでは「昵」(ちかし)と讀む。「黃徳寬」も指摘するとおり、『説文解字』日部に、

暹、日近也。从日、匿聲。春秋傳曰、私降暹燕。昵、暹或从尼。

とあり、『説文解字』日部「暹」字の或體には字形上、「昵」に作る字が看取できる。また、『爾雅』釋詁下篇に、

暹幾暹、近也。

とある。また、『説文解字』尸部に、

𨔵、從後近之。从尸匕聲。

とあり、「暹」と「尼」との意味も近いことが分かる。また、『尚書』高宗彤日篇に、

典祀無豐于昵。

とあり、賈昌朝『羣經音辨』、晁說之『嵩山文集』はこれを引用して「昵」を「尼」に作っている。また、上の「從後近之」に對する段玉裁注に、

尼、訓近。故古以爲親暹字。高宗彤日日、典祀無豐于尼。釋文、尼、女乙反。尸子云、不避遠尼。尼、近也。正義。釋詁云、卽、尼也。孫炎云、卽、猶今字。尼、近也。郭璞引尸子、悅尼而來遠。自天寶間衛包改經尼爲昵。開寶間陳諤又改釋文尼爲昵。而賈氏羣經音辨所載猶未誤也。尼之本義從後近之。若尼山乃取於圩頂水澇所止。昵之假借字也。孟子、止或尼之。尼、止也。與致遠恐泥同。

泥濘之假借字。

とあり、「尼」・「昵」・「暱」の間に互用・通假関係が認められる。「黄德寛」の指摘する通り、当該字を「暱」の省字と考え、当該字を「昵」（ちかし）と讀爲する。

【2】「孔 𠄎（孔子）曰、「善已、商也。𠄎（將）可𠄎（教）𠄎（詩）矣。」について。

『禮記』孔子閒居篇は「孔子曰」に作り、『孔子家語』論禮篇も同じ。また、兩本とも「善已、商也。𠄎可𠄎矣。」に相當する文はない。

「已」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」は「才」に作り、「哉」の假借字とするが、ここでは「已」に作る。「才」には縦畫を右に曲げる例がなく、当該字とは字形的に異なっている。当該字と比較的類似する字形は、九店楚簡第三十號簡、第三十三號簡に見られる「已」字が挙げられる。また、「已」字において縦畫が横畫より上に突き出す形は、郭店楚簡『老子』甲本第七號簡、第三十八號簡に見える。また、池田知久『郭店楚簡老子研究』八十五頁に指摘する通り、楚系文字において「已」と「巳」には字形的區別はない。ここでは、当該字を「已」に作り、この「已」は文末の語氣詞と考える。

「商」は、「濮茅左」に指摘する通り、「商」に作る。類似する字形は『汗簡』所收の『説文』、『古文四聲韻』所收の『説文』に見られる。「濮茅左」は当該字の字形を庚盤の「商」に近いとする。また、「濮茅左」の指摘する通り、『史記』仲尼弟子列傳に「卜商、字子夏。少孔子四十四歳。」とあり、「商」は子夏の名。

「𠄎」は、「教」は省字または異體字。「濮茅左」は「教」と讀み、「劉樂賢」は文義上の観点から「學」と讀む。「濮茅左」の指摘する通り、「𠄎」は『説文解字』教部に、

𠄎、上所施、下所效也。从支𠄎。

とあり、「𠄎」は「教」の構成要素の一部であることがわかる。「濮茅左」の指摘の通り、上海博楚簡『性情論』などの「𠄎」は「教」と讀まれている。また、同様の字形は郭店楚簡『老子』甲本第十二號簡に二例、十七號簡、郭店楚簡『緇衣』第二十七號簡、『尊徳義』第二十號簡、『六徳』第二號簡、第二十一號簡、第四十一號簡に見える。また、同様の字形は『汗簡』所收の「教」、『古文四聲韻』所收の昭卿「字指」の「教」、『古文四聲韻』所收の「古老子」の「學」に見られる。「教」と「學（斆）」とは通假・互用（もしくは誤用）例も多く、例えば王弼本『老子』第四十二章に、

吾將以爲教父。

とあり、馬王堆帛書『老子』甲本は「教」を「學」に作っている（その他は『古字通假會典』七二六頁參照）。そこで、当該字を「教」と讀むか「學」と讀むかを考える必要がある。例えば、郭店楚簡『老子』甲本第十二號簡に、

𠄎不𠄎、復（復）衆之所 𠄎 𠄎（過）。

とあり、『郭店楚墓竹簡』（文物出版社）の注釋〔三一〕は、通行本・馬王堆本『老子』が「學不學」に作るものの、「孝」は『説文解字』、『汗簡』の「教」字の古文の省字と考え、「教」と讀爲している。譯者もこの説を支持する。

また、「學」という字があるが、「學」字やそれにほぼ類似する字形は郭店楚簡『老子』乙本第三號簡、第四號簡、郭店楚簡『老子』丙本第十三號簡に二例、『尊德義』第四號簡、第五號簡に二例、第十九號簡、『性自命出』第八號簡、第三十六號簡に見え、「學」のと讀爲されている。譯者はこの「學」が「學」の省字であると考え。『尊德義』では「孝」を「教」と讀み、「學」を「學」と讀んで使い分けされている。ここでは当該字を「教」と讀爲する。

「叒」は、「濮茅左」・「季旭昇3」は「時」に作るが、「圖版」に従って「叒」に作る。「叒」は、「寺」の繁文もしくは「時」の省字。同様の字形は包山楚簡第二〇九號簡、第二一二號簡、第二一六號簡、郭店楚簡『五行』第七號簡、曾侯乙鐘、曾侯乙鼎などに見られる（何琳儀『戰國古文字典』四十四頁、『戰國文字編』七十五頁など参照）。何琳儀『戰國古文字典』の「時」字において「時、从口、寺聲。疑寺之繁文。」と指摘している。また、『説文解字』言部に、

𠄎、志也。从言、寺聲。𠄎、古文詩省。

とあり、『説文解字』日部に、

𠄎、四時也。从日、寺聲。𠄎、古文時。从之日。

とある。当該字は「時」「詩」と諧聲符を同じくしており、「詩」と假借可能。

【3】「𠄎(成)王不敢康、迺(夙)夜言(基)𠄎(命)又(宥)寤(密)。亡(無)聖(聲)之縵(樂)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

夙夜其命宥密、無聲之樂也。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

夙夜基命宥密、無聲之樂也。

に作る。兩本とも「𠄎王不敢康」に相當する文章はない。また、ここが引用していると考えられる文章は、『詩經』周頌の昊天有成命にあり、

成王不敢康、夙夜基命宥密。

に作る。

「𠄎」は、「濮茅左」・「季旭昇3」は「城」に作るが、「圖版」に従って「𠄎」に作る。「𠄎」は類似する字形として「𠄎」が擧げられるが、「𠄎」は包山楚簡、楚帛書、鄂君啓車節、中山王𠄎鼎などに見られ、「城」と讀まれている（何琳儀『戰國古文字典』、容庚『金文編』参照）。よって、ここでは「成」と讀む。

「迺」は、「濮茅左」・「季旭昇3」に指摘するとおり、「夙」と讀む。「濮茅左」に指摘するとおり、『説文解字』夕部に、

夙、早敬也。从夙。持事雖夕不休、早敬者也。𠄎、古文夙。从人囚。𠄎、亦古文夙。从人囚。宿从此。

とある(「夙」は「夙」の本字)。また、「𠄎」・「𠄎」と同様または類似する字形は『汗簡』所収の「夙」、『古文四聲韻』所収「古尚書」の「夙」などにも見える。当該字と「夙」の古文は同様の形態素を持つため、假借可能と考える。暫時「季旭昇3」の指摘する、「𠄎」、當從夙・𠄎省聲。」という説に従う。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇・『詩經』昊天有成命は「夙」に作る。

「𠄎」は、「季旭昇3」は「𠄎」に作るが、「圖版」・「濮茅左」に従って「𠄎」に作る。

「𠄎」は、「基」の異體字または通假字と考える。「濮茅左」・「季旭昇3」は「基」と読み、「何琳儀」は「其」と読む。また、「趙建偉」は元々「共」であったのが訛って「其」となったと推測し、その例を挙げ、「恭」と読んでいる。ここでは、「濮茅左」・「季旭昇3」と同様に「基」と読む。本篇第二號簡、第九號簡に「元」字が看取できるが、「元」を書き表すのに、「𠄎」と書くとはやや考え難い。「濮茅左」の指摘する通り、『説文解字』言部に、

𠄎、忌也。从言、其聲。周書曰、上不𠄎于凶德。

とあり、『康熙字典』言部に「𠄎、古文𠄎。」とある。また、「濮茅左」は天星觀秦簡に「𠄎」があると指摘するが、実際にこれらを見ると「𠄎」に作るべきである。これが王孫遺者鐘や王子午鼎の「𠄎」と同定できたとしても、『説文解字』では「𠄎」と「𠄎」を區別しており、「𠄎」は『説文解字』言部に、

𠄎、欺也。从言、其聲。

とあり、『説文解字』では「𠄎」と「𠄎」を區別していることに注意すべきである。また、『禮記』孔子閒居篇・『齊詩』は「其」に作り、『孔子家語』論禮篇・『毛詩』は「基」に作る(王先謙『詩三家義集疏』参照)。「𠄎」と「基」は共に「其」を聲符としており、通假可能と考える。

「𠄎」は、「濮茅左」・「季旭昇3」は「命」に作るが、「圖版」に従って「𠄎」に作る。「𠄎」は「令」の異體字と考える。「濮茅左」・「季旭昇3」と同様に「命」と讀爲する。「命」は『説文解字』口部に、

𠄎、使也。从口从令。

とあり、「命」は「令」を構成要素としていることがわかる。また、「令」と「命」の互用・通假例は極めて多く、例えば『周禮』秋官大司馬篇は、

七歲、屬象胥、諭言語、協辭命。

とあり、『大戴禮記』朝事篇はこの「命」を「令」に作っている(その他は『古字通假會典』九十四頁参照)。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇・『詩經』昊天有成命は「命」に作る。

「又」は、「宥」の通假字。「濮茅左」に指摘する通り、『禮記』王制篇の「王三

又然後制刑。」の鄭玄注に、「又、當作宥。宥寬也。」とあり、「又」・「宥」は互用・通假の関係にあると言える。また、『漢字古音手冊』によると、「又」と「宥」はともに匣母之部に屬し、通假可能。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「宥」に作る。

「宥」は、「寬い」の意。『詩經』昊天有成命は『國語』周語上篇に引用されており、

且其語說昊天有成命、頌之盛德也。其詩曰、昊天有成命、二后受之。成王不敢康、夙夜基命宥密。緝熙、亶厥心肆其靖之。是道成王之德也。成王能明文昭、能定武烈者也。夫道成命者、而稱昊天、翼其上也。二后受之、讓於德也。成王不敢康、敬百姓也。夙夜、恭也。基、始也。命、信也。宥、寬也。密、寧也。緝、明也。熙、廣也。亶、厚也。肆、固也。靖、齎也。其、始也。翼上德讓、而敬百姓。其中也、恭儉信寬、帥歸於寧。其終也、廣厚其心、以固齎之。始於德讓、中於信寬、終於固齎、故曰成。單子儉敬讓咨、以應成德。單若不興、子孫必蕃、後世不忘。

とある。

「宥」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」に指摘する通り「密」と讀む。「濮茅左」は包山楚簡第二五五號簡に二例、第二二七號簡に見える字形を同様の字形として解釋しているが、當該字とこの字形は異なっていることに注意すべきである。「濮茅左」に指摘するとおり、包山楚簡第二五五號簡の字形は何琳儀『戰國古文字典』は「宐」と楷書化し（一一〇二頁）、「包山楚簡宐下加日旁爲飾、古文字中習見。」としている。また、『說文解字』八部は、

宐、分極也。从八弋。弋亦聲。

とあり、「弋」が「宐」の聲符であることがわかる。しかし、當該字は「戈」に従っている字形である。

少数であるが、「戈」に従っている「宐」字は存在し、包山楚簡第一二七號簡、第一三九號簡にみえる。よって當該字上部は「宐」の異體であると考え。『說文解字』山部に、

宐、山如堂者。从山宐聲。

とあり、「宐」は「宐」を聲符としており、兩字は通假可能と考える。また、「宐」と「宐」との通假例は多く、孔子の弟子の「宐子」の名はしばしば「宐子」に作られる。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇・『毛詩』昊天有成命は「宐」に作り、『魯詩』は「謚」に作る（王先謙『詩三家義集疏』参照）。

「宐」は、ここでは「しずか」の意とする。『禮記』孔子閒居篇の鄭玄注は、「宐、靜也。」とする。また、『爾雅』釋詁に、「宐康、靜也。」とある。

『城(成)王不敢康、迺(夙)夜言(基)命又(宥)宥(密)。』について。この句は上述したとおり、『詩經』昊天有成命の一節にあり、

昊天有成命、二后受之。成王不敢康、夙夜基命宥密。

とある。また、『詩經』昊天有成命は上海博楚簡『孔子詩論』の第六號簡にも言及されており、

二后受之、貴馭显矣。

とある。

【4】「𦏧(威)我(儀)𦏧 𦏧(速速)、〔不可選也。無體之禮也。凡民有喪、匍匐救之。無服〕之𦏧(喪)也。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

威儀速速、不可選也。無體之禮也。凡民有喪、匍匐救之。無服之喪也。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

威儀速速、不可選也。無體之禮也。凡民有喪、扶伏救之。無服之喪也。

に作る。また、ここが引用していると考えられる文章は、『詩經』邶風柏舟に、

威儀棣棣、不可選也。

とあり、『詩經』邶風谷風に、

何有何亡、黽勉求之。凡民有喪、匍匐救之。

とある。

「𦏧」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」は「𦏧」に作るが、「圖版」に忠實に従って「𦏧」に作る。「𦏧」は「威」と讀爲する。「濮茅左」に指摘するとおり、類似する字形は信陽楚簡二・〇一三(何琳儀『戰國古文字典』一一八六頁参照)に見える。この他に、ほぼ同様の字形は郭店楚簡『老子』乙本第五號簡に二例、上海博楚簡『魯邦大旱』第二號簡にも見える。郭店楚簡『老子』乙本第五號簡に見える同様の字形は、多くは「示」と「畏」に従う字形として理解されているが、その字形からやはり「𦏧」に作るべきであろう。また、『説文解字』鬼部に、

鬼、人所歸爲鬼。从人象鬼頭。鬼陰气賊害。从ム。凡鬼之屬皆从鬼。𦏧、古文从示。

とあり、當該字は『説文解字』において「鬼」の古文と構成要素が同じである。『漢字古音手冊』によると、「鬼」は見母微部、「威」は影母微部に屬す。聲母はともに牙喉音、韻部は同じであり通假可能。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇・『詩經』邶風柏舟は「威」に作る。

「我」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」に指摘するとおり「儀」と讀む。「我」は「儀」の通假字。『説文解字』人部に、

𦏧、度也。从人義聲。

とあり、『説文解字』我部に、

𦏧、己之威義也。从我羊。𦏧、墨翟書義从弗。魏郡有𦏧陽鄉。讀若鎡。今屬鄴本内黄北二十里。

とあり、「我」は「儀」の構成要素の一部になっている。また、郭店楚簡『唐虞之道』第九號簡、『語叢一』第二十二號簡、『語叢三』第五號簡の「我」は「義」と

讀まれている例がある。『漢字古音手冊』によると「我」と「儀」はともに疑母歌部に屬し、通假可能。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇・『詩經』邶風柏舟は「儀」に作る。

「𠄎」は、「遲」の省字。「濮茅左」に指摘する通り、『説文解字』辵部に、
 𠄎、徐行也。从辵、犀聲。詩曰、行道遲遲。𠄎、遲或从𠄎。𠄎、籀文遲。从犀。
 とある。また、「濮茅左」の指摘するとおり、『古文四聲韻』所引「古尚書」の「遲」は「𠄎」に作っている。また、同様の字形は『汗簡』所收の「遲」、包山楚簡第一九八號簡、第二〇〇號簡、第二〇二號簡、郭店楚簡『老子』乙本第十號簡に見え、みな「遲」の古文としての「𠄎」と解釋されている。また、何琳儀『戰國古文字典』
 「𠄎」に、「𠄎、从辵（或省作止）、𠄎聲。遲之異文。」とある（一二二八頁参照）。
 「濮茅左」は、『爾雅』に「祁祈遲遲、徐也。」とあり、郭璞注は「皆安徐。」とあり、それを引申して「行禮以和、而又從容不迫。」の意とする。また、『詩經』邶風柏舟に「威儀棣棣、不可選也。」とあり、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇はこの「棣棣」を「速速」に作っていることを指摘し、『禮記』孔子閒居篇の鄭玄注における「速速、安和之貌也。言君之威儀安和速速然、則民倣之、此非有升降揖讓之禮也。」とあることを指摘。また、「遲」「速」「棣」は音が通じるとしている。『漢字古音手冊』によると「遲」は定母脂部、「速」「棣」は定母質部に屬す。聲母は同じであり、韻部は對轉の關係にあり、三字は通假可能。

「濮茅左」・「季旭昇3」は「遲遲」と讀むが、ここでは『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇と同じく「速速」と讀む。また、本篇第十一號簡に再び「𠄎我𠄎 𠄎」とあり、「濮茅左」はこの「𠄎 𠄎」を「速速」と讀んでいる。この二文の關係を圖示すると、

『民之父母』

	無聲之樂	無體之禮	無服之喪
三無①	𠄎（成）王不敢康、迺（夙）夜言（基）𠄎（命）又（宥）寤（密）。	𠄎（威）我（儀）𠄎 𠄎、〔不可選也。〕	〔凡民有喪、匍匐救之。〕
五起② 第一起	𠄎（氣）𠄎（志）不𠄎（違）。	𠄎我𠄎 𠄎。	內𠄎（怨）𠄎（洵）悲。

『禮記』孔子閒居篇

	無聲之樂	無體之禮	無服之喪
三無①	夙夜其命宥密。	威儀速速、不可選也。	凡民有喪、匍匐救之。
五起② 第一起	氣志不違。	威儀遲遲。	內怨孔悲。

ここから分かるとおり、『禮記』孔子閒居篇（『孔子家語』論禮篇もほぼ同じ）は

①で『詩』の文章を引用した後、②で別な言い方をしている。ここから、『禮記』孔子閒居篇における②は、①とは別の言い方をすることによって①の注釋の様な役割を果たしているのではないかと考える。それは、『民之父母』・『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇において五起の順序で唯一共通しているのがこの始めの部分のみであるが、この五起の始めの考えは三無の説明で孔子が挙げた「三無に近い『詩』」とそれぞれ對應していると考えられるからである。ここから、三無から五起へと整合性をもって拡充するにあたって、この五起の始めは重要な箇所であるために、上の三文獻においてここだけはきちんと共通しているのである。

「𣦵」は、「季旭昇3」は「喪」に作るが、「圖版」・「濮茅左」に従って「𣦵」に作る。「𣦵」は「葬」の異體字または通假字。「葬」の異體字として「𣦵」や「𣦵」が挙げられるが、「𣦵」は包山楚簡第九十一號簡、第一五五號簡に三例あり、「𣦵」は包山楚簡第九十一號簡に見える。湖北省荊沙鐵路考古隊『包山楚簡』（文物出版社、一九九一年十月）による第九十一號簡の釋文はこの字を「𣦵」に作っているが、「𣦵」に作るべきである。なお、上に挙げた『包山楚簡』の考釋（152）では「𣦵、讀如葬。」とある。もし、これらの包山楚簡の字形の上部が「藏」の省字あるいは異體字であると假定すると、「藏」はこの字の聲符と考えられる。『漢字古音手冊』によると、「藏」は從母陽部、「葬」は精母陽部に屬し、聲母は同じ齒頭音、韻部は同じであり、通假可能。

「𣦵」は、「喪」と讀む。當該字上部は本稿第三章【4】で指摘したように「桑」の訛變と考えたが、「桑」と「喪」は心母陽部に屬す。やはり聲母は同じ齒頭音、韻部は同じ陽部である。よって、ここから當該字上部の「九」は「桑」の省聲と言えよう。また、「葬」と「喪」の互用・通假例は『禮記』王制篇に、

喪從死者、祭從生者。

とあり、『白虎通』爵篇はこれを引用し、

王制曰、葬從死者、祭從生者。

に作る（『古字通假會典』三〇八頁參照）。

「不可選也。無體之禮也。凡民有喪、匍匐救之、無服」は、「濮茅左」・「季旭昇3」と同様に、『禮記』孔子閒居篇に従って「不可選也。無體之禮也。凡民有喪、匍匐救之。無服」を補う。『孔子家語』論禮篇は「匍匐」を「扶伏」に作る以外は同じ。以上の十九字を補うと一簡が三十六字となる。完全に残っている簡は第五號簡（計三十三字）のみであるため、その誤差範囲ははっきりとわからないが、この十九字を補って大過ないであろう。

「魂(威)我(儀)巨 𠄎(逮逮)、〔不可選也。〕」は『詩經』邶風柏舟にあるが、この句は「季旭昇3」も指摘するとおり、『春秋左氏傳』襄公三十一年に、

公曰、善哉。何謂威儀。對曰、有威而可畏、謂之威。有儀而可象、謂之儀。君有君之威儀、其臣畏而愛之、則而象之。故能有其國家、令聞長世。臣有臣之威

儀、其下畏而愛之。故能守其官職、保族宜家。順是以下、皆如是。是以上下能相固也。詩曰、威儀棣棣、不可選也。言君臣、上下、父子、兄弟、内外、大小、皆有威儀也。

とあり、この句の説明がある。また、この『詩經』邶風柏舟は上海博楚簡『孔子詩論』第二十六號簡にも挙げられており、

北白舟、悶■。

とある。また、「凡民有喪、匍匐救之。」は『詩經』邶風谷風にあるが、上海博楚簡『孔子詩論』第二十六號簡に、

浴風、忞■。

とある。

【5】「子晷(夏)曰、「元(其)已設(悟)也。敗(散(美))矣。宏(宏)矣。大矣。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

子夏曰、言則大矣。美矣。盛矣。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

子夏曰、言則美矣。大矣。

に作る。

「已」は、「濮茅左」は「才」に作るが、「圖版」に従って「已」に作る。本稿第四章【2】参照。「已」は「すでに」と訓じる。この文と類似する表現は、『孔子家語』禮運篇に、

周公其已衰矣。

とある。

「設」は、「濮茅左」は「設」、疑爲「許」繁文字。《說文・言部》「許、聽也。从言、午聲。」《說文通訓定聲・豫部》「許、假借御……又爲處。」此句意爲三無之論根本都在了、完全可以聽從。或釋爲「設。」とする。「李銳」・「劉信芳」は「語」と讀む。「林素清」は、「疑是「詩」的異構。」とする。また、「黃錫全2」は「語」と讀むのは文義に合わないとし、『孟子』梁惠王上篇の「則王許之乎。」の趙岐注の「許、信也。」を引用し、「您說的這些道理令人信服」の意であるとする。

先に挙げた「李銳」は、「案此字可分析爲許字加繁飾、許從午聲、「午」・「忞」古與「悟」通。」と指摘している。ここでは、そこで若干言及されている「悟」と讀むこととする。

「敗」は、「敝」の錯字。「濮茅左」は「敗」を「快」の通假字としているが、「疑「敝」之誤寫。」と指摘している。「劉信芳」・「何琳儀」・「黃錫全2」・「季旭昇3」は、當該字を「美」の通假字とする。「林素清」は、「濮茅左」の「疑「敝」之誤寫。」という説を支持し、「楊澤生3」も當該字を「散」の書き誤りとしている。「敗」

は確かに「快」と通假可能であるが（「敗」は竝母月部、「快」は溪母月部）、「快」と讀むこと自體がやや根拠に缺けている。また、「敗」と「美」が通假可能とするには聲母・韻部はともに必ずしも近いとは言えない（「敗」は竝母月部、「美」は明母脂部）。ここでは、「濮茅左」の第二の説・「林素清」・「楊澤生 3」を支持し、「敗」は、「𦵑」の錯字とする。

また、第二號簡に「𦵑」字があり、この字は「敗」と讀む。一般的に楚系文字中の「敗」と讀む字は「𦵑」に作る。例えば、郭店楚簡には「𦵑」が十一例、包山楚簡には一〇四例見られるが、これらの中に「敗」に作る例は見られない。「𦵑」の字形は曾侯乙墓竹簡中に四例見られるが、多くは「𦵑」に作っている。よって、ここでは「楊澤生 3」の説を支持し、當該字を「𦵑」の書き誤りと判断する。「𦵑」は、郭店楚簡『老子』甲本第十五號簡、『唐虞之道』第十七號簡、『六德』第三十八號簡などに見えるが、いずれも「美」と讀まれている。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「美」に作る。

「𦵑」は、「宏」の通假字。「𦵑」は『説文解字』又部に、

𦵑、臂上也。从又从古文。𦵑、古文𦵑象形。𦵑、𦵑或从肉。
とあり、「𦵑」の或體として「肱」が挙げられているが、「肱」と「宏」の互用・通假例は、『山海經』海外西經に、「奇肱之國。」とあり、郭璞注に「肱、或作宏。」とある（『古字通假會典』三十頁参照）。また、『漢字古音手冊』によると、「肱」は見母蒸部、「宏」は匣母蒸部に屬す。聲母は牙喉音、韻部は同じであり通假可能。

【6】「𦵑（盡）〔於此而已乎。孔 𦵑（孔子）曰、何爲其然。猶有五起焉。子夏曰、] 可𦵑（得）而𦵑（聞）𦵑（歟）。〕について。

『禮記』孔子閒居篇は、

言盡於此而已乎。孔子曰、何爲其然也、君子之服之也、猶有五起焉。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

言盡於此而已乎。孔子曰、何謂其然也。吾語汝其義。猶有五起焉。

に作る。

「𦵑」は、「盡」と讀む。同様または類似する字形は包山楚簡・郭店楚簡・上海博楚簡などに見られる（何琳儀『戰國古文字典』一一五三頁、張光裕主編『郭店楚簡研究第一卷文字編』三四二頁などを参照）。これらの内、「𦵑」の多くは、「盡」と讀まれている。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「盡」に作る。

「於此而已乎。孔 𦵑曰、何爲其然。猶有五起焉。子夏曰」は、「濮茅左」は「於此而已乎。孔子曰、何爲其然。猶有五起焉。子夏曰、□」を補い、「季旭昇 3」は、「於此而已乎。孔 𦵑（孔子）曰、猶有五起焉。子𦵑（夏）曰、所謂五起」を補う。本篇で唯一完全に残っている第五號簡を見ると、計三十三字残存しているが、「季旭昇 3」は、「濮茅左」の補缺では計三十七字となり、字数が多すぎると指摘する。

「季旭昇3」は「孔 𠄎」を二字として計算している様であるが、そもそも「孔 𠄎 (孔子)」という合文は「圖版」を見る限りにおいては一字分として扱われている。そこで、本簡に残っている「孔 𠄎 (孔子)」も一字と計算すれば、「濮茅左」の補缺ではこの第十號簡は計三十五字となる。ちなみに、ここでは「濮茅左」が補っている「□」を無視する。つまり、「子夏曰」の後に文字を補わない。「□」を補わなければ、計三十四字となり、この補缺はおおかた正しいものと推定できる。また、「濮茅左」が指摘するとおり、四部叢刊本『禮記』孔子閒居篇は「乎」字がない。「乎」字を補わなければ、本簡は計三十三字となる。しかし、ここでは暫時「乎」も補うこととする。

「𠄎」は、「圖版」・「濮茅左」・「季旭昇3」に従って「𠄎」に作る。「𠄎」は「𠄎」の省字または異體字。同様の字形は郭店楚簡『老子』甲本第五號簡、第二十號簡に見え、「𠄎」は郭店楚簡『唐虞之道』第二十二號簡、『語叢三』第十七號簡に見える。

「𠄎」は、「濮茅左」・「季旭昇3」に指摘する通り、「歟」と讀む。當該字は「歟」と共通する構成要素を有するため、兩字は通假可能。

第 五 章

本 文

孔 𠄎 (孔子) 𠄎 (曰)、「亡(無)聖(聲)之綫(樂)、𠄎(氣)𠄎(志)不𠄎(違)」。【1】(以上第十號簡) [亡]𠄎(體)之𠄎(禮)、𠄎(威)我(儀)𠄎 𠄎(遲遲)。【2】亡(無)備(服)之𠄎(喪)、内𠄎(怨)𠄎(洵)悲。【3】亡(無)聖(聲)之綫(樂)、𠄎(塞)于四方。【4】亡𠄎(體)之𠄎(禮)、日𠄎(就)月𠄎(將)。【5】亡(無)𠄎(服)之(以上第十一號簡)[𠄎]、屯(純)𠄎(德)同(孔明)。【6】亡(無)聖(聲)之綫(樂)、它(施)𠄎(及)孫 𠄎(孫子)。【7】亡(無)𠄎(體)之𠄎(禮)、𠄎(塞)于四𠄎(海)。【8】亡(無)備(服)之𠄎(喪)、爲民父母。【9】亡(無)聖(聲)之綫(樂)、𠄎(氣)(以上第十二號簡)[𠄎]既𠄎(得)。【10】亡(無)𠄎(體)之𠄎(禮)、𠄎(威)我(儀)異 𠄎(翼翼)。【11】亡(無)備(服)𠄎(喪)、它(施)𠄎(及)四或(域)。【12】亡(無)聖(聲)之綫(樂)、𠄎(氣)𠄎(志)既從。【13】亡(無)𠄎(體)之𠄎(禮)、上下𠄎(和)同。【14】亡備(服)(以上第十三號簡)[之]𠄎(喪)、𠄎(以) 畜𠄎(萬)邦。𠄎 【15】(以上第十四號簡)

訓 讀

孔 𠄎(孔子) 𠄎(曰)わく、「亡(無)聖(聲)の綫(樂)は、𠄎(氣)𠄎(志)𠄎(違)わず。[亡](無)𠄎(體)の𠄎(禮)は、𠄎(威)我(儀)𠄎 𠄎(遲遲)たり。亡(無)備(服)の𠄎(喪)は、内𠄎(怨)にして𠄎(洵)に悲し。亡(無)聖(聲)の綫(樂)は、四方に𠄎(塞)がる。亡(無)𠄎(體)の𠄎(禮)は、日に𠄎(就)り月に𠄎(將)なり。亡(無)𠄎(服)の[𠄎]は、屯

(純) 𠄎(徳) 同(孔) だ明らかなり。亡(無) 聖(聲) の𦉳(樂) は、它(施) きて孫 𠄎(孫子) に返(及) ぶ。亡(無) 𦉳(體) の𦉳(禮) は、四海(海) に壅(塞) がる。亡(無) 備(服) の𦉳(喪) は、民の父母と爲る。亡(無) 聖(聲) の𦉳(樂) は、𦉳(氣) [志] 既に𦉳(得) る。亡(無) 𦉳(體) の𦉳(禮) は、梟(威) 我(儀) 異 𠄎(翼翼) たり。亡(無) 備(服) [之] 𦉳(喪) は、它(施) きて四或(域) に返(及) ぶ。亡(無) 聖(聲) の𦉳(樂) は、𦉳(氣) 𦉳(志) 既に従う。亡(無) 𦉳(體) の𦉳(禮) は、上下禾(和) 同す。亡(無) 備(服) [之] 𦉳(喪) は、𦉳(以) って𦉳(萬) 邦を畜う。」

口語譯

孔子は言う、「音のない音楽は、氣と志がぴったりと離れない。形 [の] ない禮は、振る舞いがのびのびとする。(喪に) 服さない喪は、心の中に思いやりがあって眞に悲しむ。音のない音楽は、四方に充ちる。形のない禮は、日ごとに完成され、月ごとに大きくなる。(喪に) 服さない [喪] は、その純粋な徳がとても明瞭になる。音のない音楽は、子孫にまで及ぶ。形のない禮は、四海に充ちる。(喪に) 服さない喪は、民の父母となる。音のない音楽は、氣と志を既に獲得する。形のない禮は、振る舞いが恭しく慎しみ深くなる。(喪に) 服さない喪は、施行して四域にその影響を及ぼす。音のない音楽は、氣と [志] が既にぴったりと並ぶ。形のない禮は、上の者と下の者とが和合する。(喪に) 服さない喪は、萬邦を養い育てるのである。」

注 釋

【1】「孔 𠄎 (孔子) 𦉳 (曰) 、亡(無) 聖(聲) 之𦉳(樂) 、𦉳(氣) 𦉳(志) 不𦉳(違) 。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

孔子曰、無聲之樂、氣志不違。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

孔子曰、無聲之樂、氣至不違。

に作る。

「𦉳」は、この字形の來源は不詳。「濮茅左」は「𦉳」に作り、「曰」と讀む。「黄錫全2」は「于」と楷書化し、「曰」と通假すると述べるが、自らが指摘するように、「于」と「曰」が通假する例がないため、この説は信じがたい。ここでは暫時「濮茅左」に従って「𦉳」に作る。「𦉳」は、「濮茅左」・「黄錫全2」・「季旭昇3」と同じく「曰」と讀む。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「曰」に作る。

「𦉳」は、「季旭昇3」は「𦉳」に作るが、「圖版」・「濮茅左」に従って「𦉳」に作る。「𦉳」は、「氣」と讀む。詳しくは本稿第三章【7】参照。

「𦉳」は、「違」の異體字または假借字。同様の構成要素を持つ字は『説文解字』

是部に、

𨔵、是也。从是、韋聲。春秋傳曰、犯五不𨔵。𨔵、籀文𨔵。从心。

とあり、「𨔵」は「𨔵」字の籀文として見られる。「𨔵」と「違」の互用・通假例は、「濮茅左」の擧げてある通り、『文選』幽通賦に「違世業之可懷。」とあり、李善注に「違或作𨔵。𨔵亦恨也。」とある。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「違」に作る。

【2】「〔亡〕𨔵(體)之𨔵(禮)、𨔵(威)我(儀)𨔵 𨔵(遲遲)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

無體之禮、威儀遲遲。

に作る。『孔子家語』論禮篇も同じ。

「亡」は、「濮茅左」と同様に「亡」字を補う。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「無」に作る。

「𨔵 𨔵」は、「濮茅左」は「速速」と讀むが、「季旭昇 3」と同じく「遲遲」と讀む。本稿第四章【4】参照。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「遲遲」に作る。

【3】「亡(無)備(服)之𨔵(喪)、内𨔵(怨)𨔵(洵)悲。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

無服之喪、内𨔵孔悲。

に作り、『孔子家語』論禮篇は、

無服之喪、内𨔵孔哀。

に作る。

「𨔵」は、「濮茅左」に指摘する通り「怨」と讀爲する。「季旭昇 3」の指摘するとおり、楚系文字において「𨔵」の多くは「吾」と讀まれている。また、「吾」の他には「乎」とも互用・通假することが認められている。例えば、郭店楚簡『成之聞之』第四～五號簡に、

是古(故)亡𨔵其身而存𨔵(乎)元訶。

とあり、「𨔵」は「乎」と讀まれている。『漢字古音手冊』によると、「吾」は疑母魚部、「乎」は匣母魚部に屬し、「𨔵」の聲符と考えられる「𨔵」は曉母魚部に屬す。また、「怨」は書母魚部に屬す。「吾」「乎」「𨔵」の聲母は牙喉音、「怨」の聲母は舌音に屬す。韻部はみな魚部に屬す。「季旭昇 3」は「無論從字形・或字音來看、「𨔵」字要讀爲「怨」字、是有點困難。」と指摘する通り、聲母は必ずしも近くないが、暫時「𨔵」は「怨」の通假字と考える。また、『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇は「怨」に作る。

「𠄎」は、「巽」の異體字と考える。『説文解字』丌部に、
𠄎、具也。从丌卩聲。𠄎、古文巽。𠄎、篆文巽。
とある。段玉裁注でも指摘するとおり、『説文解字』卩部に、
𠄎、二卩也。巽从此闕。

とあり、「巽」・「𠄎」の字形の一部は當該字と近似している。

「𠄎」は、「洵」と讀む。「楊澤生 2」は「洵」と通假することを指摘する。「黄錫全 2」は「皆」の異體字とし、「孔」と「巽」は義が近く、「巽」と「皆」も義が近いとする。「季旭昇 3」は「楊澤生 2」の解釋に對し「頗有可采。」としている。ここでは暫時「楊澤生 2」の説に従う。この他にも當該字と類似する字形は、上海博楚簡『孔子詩論』第九號簡第十四字目の「𠄎」という字形が擧げられる。この字は馬承源氏は「巽」に作り、「饌」と讀んでいる（『上海博物館藏戰國楚竹書』（一）、『孔子詩論』譯注、上海古籍出版社、二〇〇一年十一月）。しかし、この字の讀みには異説が多く、李零・廖名春氏は「選」、周鳳五氏は「贊」、劉信芳氏は馬承源氏の説に賛同して「饌」、姜廣輝氏は「遜」とそれぞれ讀み、李銳氏は如字で讀んで「恭」の意とし、黄人二氏は如字で讀んで「遜」と通假する、としており、その讀み方には頗る異説が多い。劉信芳『孔子詩論述学』の一六二頁參照（安徽大學出版社、二〇〇三年一月）。『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇はいずれも「孔」に作る。

「亡聖之綫、嬰忠不愆。〔亡〕體之豊、橐我𠄎 𠄎。亡備之罍、内虐𠄎悲。」について。「愆（違）」は微部、「𠄎 𠄎（遲遲）」は脂部、「悲」は微部にそれぞれ屬している。「悲」の聲符になっている「非」は、何九盈『古韻通曉』（中國社會科學出版社、一九八七年十月）を參照すると、孔廣森、嚴可均、江有誥は脂部に入れており（七十二頁參照）、微部と脂部は極めて密接な關係にあると言える。ここから、この第一起は韻文となっていると考える。また、『禮記』孔子閒居篇も第一起は、
無聲之樂、氣志不違。無體之禮、威儀遲遲。無服之喪、内恕孔悲。
に作り、「違」「遲」「悲」がそれぞれ押韻している。

【4】「亡（無）聖（聲）之綫（樂）、壑（塞）于四方。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、
無聲之樂、日聞四方。
に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は第四起にある。『孔子家語』論禮篇に對應するこの句はない。

【5】「亡體（體）之豊（禮）、日速（就）月眎（將）。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、
無體之禮、日就月將。
に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は第四起にある。『孔子家語』論禮篇に對應するこの句はない。

「逵」は、「黄德寛」は當該字を「逵」に作るが、「圖版」・「濮茅左」・「季旭昇 3」に従って「逵」に作る。當該字の字形は『説文解字』辵部「逵」字の字形とは近くないが、同様の字形は『古璽文編』所収の 3055・2672・1066（三十七頁参照）や詛楚文にも見え、いずれも「逵」に作ると考えられている。

「逵」は、「就」と讀む。『漢字古音手冊』によると、「逵」は羣母幽部、「就」は從母幽部に屬す。聲母は近くないが、韻部は一致している。『王力古漢語字典』では「就」を覺部に入れているが、多くの研究者は幽部に入れている（『古韻通曉』五十七頁参照）。「黄德寛」は、「逵」に作った上で「格」と讀み、「格」は「就」と意が近いとするが、やや牽強付會である。「季旭昇 3」は「逵」を如字で讀むが、ここでは暫時「就」の假借字と考える。『禮記』孔子閒居篇は「就」に作る。

「眎」は、「濮茅左」・「劉信芳」・「安徽」・「季旭昇 3」は「相」に作るが、「圖版」に忠實に従って「眎」に作る。「眎」は「相」の異體字。同様の字形は、『續甲骨文編』「相」字所収の乙 4695、佚 787、999、六束 128 に見え、類似する字形として「𠄎」は『古璽文編』「相」字所収の 3210、3986 に見える（八十二頁参照）。『漢字古音手冊』によると「相」は心母陽部、「將」は精母陽部に屬す。聲母はともに齒頭音、韻部は同じであり、假借可能。

「日逵月眎」は、「濮茅左」は「日就月相」と讀むが、「或讀爲「日就月將」。」としている。また、「劉信芳」は「眎」を「將」と讀み、「季旭昇 3」は「日逵月將」と讀む。「濮茅左」・「季旭昇 3」がともに指摘している通り、「日就月將」という句は、『詩經』周頌敬之に、

日就月將。學有緝熙于光明。

とあり、「日就月將」はある程度通行していた句であったのではないかと推測する。また、「季旭昇 3」も指摘するとおり、史惠鼎に「日遯月匡」とあり、この句は「日就月將」と讀まれている。『禮記』孔子閒居篇は「將」に作る。

【6】「亡(無)𦣻(服)之〔喪〕、屯(純)𦣻(德)同(孔)明。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

無服之喪、純德孔明。

に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は第四起にある。『孔子家語』論禮篇に對應するこの句はない。

「𦣻」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」の指摘するとおり、「服」の錯字。『禮記』孔子閒居篇は「服」に作る。本篇も『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇と同様に、「無聲之樂」→「無體之禮」→「無服之喪」という形式で説明されていると考えられるため、當該字は「服」の錯字と考える。

「喪」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」と同様に「喪」字を補う。『禮記』孔子閒居

篇は「喪」に作る。

「屯」は、「純」の省字または假借字。『説文解字』糸部に、

純、絲也。从糸、屯聲。論語曰、今也純儉。

とあり、「純」字は「屯」字を聲符としていることがわかる。また、「屯」と「純」の互用・通假例は『詩經』召南野有死麕に「白茅純束」という句があり、鄭玄注に「純讀如屯。」とある（その他は『古字通假會典』一三〇頁参照）。また、令狐壺に「屯惡」という語が見え、これは「純徳」と讀まれている。『禮記』孔子閒居篇は「純」に作る。

「𠄎」は、「徳」の通假字。「得」と「徳」の互用・通假例は多く、「濮茅左」も指摘する通り、馬王堆漢墓帛書『五行』など「得」を「徳」と讀む例はある（その他は『古字通假會典』四〇八頁参照）。『漢字古音手冊』によると「得」と「徳」は共に端母職部に屬し、假借可能。『禮記』孔子閒居篇は「徳」に作る。

「同」は、「濮茅左」は如字で讀むが、「孔」と讀む可能性も示唆している。「劉信芳」・「季旭昇 3」は如字で讀む。しかし、試みに『古字通假會典』を繙いてみても「同」と「孔」の通假例はない。『漢字古音手冊』によると「同」は定母東部「孔」は奚母東部に屬し、「劉信芳」が指摘するとおり、兩字の聲母は近くない。また、「黃徳寛」は「同」を「通」の意味とするが、これは牽強附會だろう。ここでは、暫時「孔」と讀爲することとする。『禮記』孔子閒居篇において對應するこの箇所は「孔」に作る。

「亡聖之綫、窒于四方。亡體之豊、日逮月昧。亡體(服)之〔喪〕、屯𠄎同明。」の押韻關係について。「方」、「昧(將)」、「明」はともに陽部に屬し、この文章は押韻關係にあると言える。また、『禮記』孔子閒居篇は第四起に、

無聲之樂、日聞四方。無體之禮、日就月將。無服之喪、純徳孔明。

とあり、「方」「將」「明」がそれぞれ陽部で押韻している。

【7】「亡(無)聖(聲)之綫(樂)、它(施)返(及)孫 𠄎(孫子)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

無服之喪、施于孫子。

に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は、第五起の「無服之喪」にある。

『孔子家語』論禮篇に對應するこの句はない。

「它」は、「施」の假借字。『禮記』孔子閒居篇は「施」に作る。『説文解字』於部に、

旃、旗兒。从於、也聲。𠄎樂施字。子旗知施者旗也。

とあり、「也」を聲符にしていることがわかる。また、『戰國古文字典』「它」字に

は、「也・它形體雖来源非一、但因小篆已它爲也、且音亦近、故典籍二字每多通用。」(八六三頁参照)とあり、「也」を聲符とする「施」は「它」と通假可能であると考えられる。また、『古字通假會典』によると、「它」は透母歌部、「施」は書母歌部、「也」は餘母歌部に屬す。聲母はともに舌音、韻部はともに同じであり通假可能であると考えられる。

「返」は、「及」の異體字または通假字。「濮茅左」も指摘するとおり、同様の字形は臯弔盥に見え(『金文編』一八九頁参照)、『金文編』は「及」字のカテゴリーに入れている。また、『説文解字』又部に、

及、逮也。从又从人。𠄎、古文及。秦刻石及如此。𠄎、亦古文及。𠄎、亦古文及。

とあるが、当該字のように「人」と「又」の間に一畫ある形は候馬盟書の「及」字にしばしば見える。「返」は「及」を構成要素としているため通假可能。

「孫 𠄎」は、「濮茅左」の指摘するとおり、「孫 𠄎」は「孫子」の合文。同様の例は周筆匜に「孫 𠄎永實用」とあり、『金文編』「孫」字の注において「子孫二字合文。」とある。「孫子」は「子孫」の意。『詩經』大雅皇矣に、

既受帝祉、施于孫子。

とあり、『詩集傳』には、

既受上帝之福、而延及于子孫也。

とある。

【8】「亡(無)體(體)之豊(禮)、壅(塞)于四海(海)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

無體之禮、施及四海。

に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は、第五起にある。『孔子家語』論禮篇に對應するこの句はない。

【9】「亡(無)備(服)之翼(喪)、爲民父母。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

無聲之樂、氣志既起。

に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は、第五起の「無聲之樂」にある。ちなみに、この「爲民父母」と對應する句は『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇にはない。また、『禮記』孔子閒居篇の「氣志既起」に相當する句は本篇にはない。

「亡聖之縵、它返孫 𠄎。亡體之豊、壅于四海。亡備之翼、爲民父母。」における押韻關係について。「孫 𠄎(孫子)」の「子」、「海(海)」、「母」はそれぞれ之部に屬し、この文

は押韻関係にあると言える。また、『禮記』孔子閒居篇の第五起に、

無聲之樂、氣志既起。無體之禮、施及四海。無服之喪、施及孫子。
とあり、「起」「海」「子」がそれぞれ之部で押韻している。

【10】「亡(無)聖(聲)之縵(樂)、旻(氣)[志]既旻(得)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

無聲之樂、氣志既得。

に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は、第二起にある。『孔子家語』論禮篇に對應するこの句はない。

「志」は、「濮茅左」と同様に「志」字を補う。『禮記』孔子閒居篇は「志」に作る。

【11】「亡(無)體(體)之豊(禮)、梟(威)我(儀)異 𠃉(翼翼)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

無體之禮、威儀翼翼。

に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は、第二起にある。『孔子家語』論禮篇に對應するこの句はない。

「異」は、「異」字の下部が「矢」に従う字形は包山楚簡の「異」字に特徴的に見られる。「濮茅左」に指摘するとおり「翼」と讀む。「異」と「翼」は聲符を共にしており、假借可能。「異」と「翼」の互用・通假例は、例えば『韓非子』難三篇に、

異日、其御問曰、夫子何以知之。

とあり、『論衡』非韓篇には、

翼日、其僕問曰、夫子何以知之。

とある(『古字通假會典』三七五頁参照)。また、『漢字古音手冊』によると、「異」と「翼」はともに餘母職部に屬し通假可能。また、『禮記』孔子閒居篇と『孔子家語』論禮篇は「翼」に作る。

「翼翼」は、「恭しく慎む様子」の意。『詩經』大雅文王に、

世之不顯、厥猶翼翼。

とあり、毛亨傳は「翼翼、恭敬。」とある。また、『詩經』大雅大明に、

維此文王、小心翼翼。

とあり、鄭玄箋に「翼翼、恭慎貌。」とある。

【12】「亡(無)備(服)菴(喪)、它(施)及(及)四或(域)。」について。

『禮記』孔子閒居篇は、

無服之喪、施及四國。

に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は、第二起にある。『孔子家語』論

禮篇に對應するこの句はない。

「亡（無）備（服）斃（喪）」は、本來「亡（無）備（服）之斃（喪）」であったと考える。「季旭昇3」はここに「之」を補う。『民之父母』・『禮記』孔子閒居篇はともに「無聲之樂」→「無體之禮」→「無服之喪」という形式で書かれているため、ここに「之」がないのは不自然である。これは抄者の書き誤りと考える。

「斃」は、「季旭昇3」は「喪」に作るが、「圖版」・「濮茅左」に従って「斃」に作る。「斃」は「喪」の異體字と考える。『禮記』孔子閒居篇は「喪」に作る。

「或」は、「濮茅左」・「季旭昇3」は「國」に作るが、ここでは「或」に作る。「季旭昇3」の指摘するとおり、先秦文獻での「國」は「域」と同義。この問題についての詳しい考察は、大西克也「「國」の誕生—出土資料における「或」系字の字義の變遷—」（『楚地出土資料と中國古代文化』、汲古書院、二〇〇二年三月）や、大西克也「論古文字資料中的“邦”和“國”」（『古文字研究』第二十三輯、中華書局、二〇〇二年六月）を参照されたい。『禮記』孔子閒居篇は「國」に作る。

「亡聖之綫、旻[志]旻。亡（無）體之豐、梟我異 Ⅱ。亡備 [之] 斃、它返四或。」における押韻關係について。「旻（得）」、「異（翼）」、「或（域）」はともに職部に屬し、この文が押韻關係にあると言える。また、『禮記』孔子閒居篇の第二起に、

無聲之樂、氣志旻得。無體之禮、威儀翼翼。無服之喪、施及四國。
とあり、「得」「翼」「國」がそれぞれ職部で押韻している。

【13】「亡（無）聖（聲）之綫（樂）、旻（氣）岌（志）旻從。」について。
『禮記』孔子閒居篇は、
無聲之樂、氣志旻得。
に作り、『孔子家語』論禮篇は、
無聲之樂、所願必從。
に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は、第三起にある。

【14】「亡（無）體（體）之豐（禮）、上下禾（和）同。」について。
『禮記』孔子閒居篇は、
無體之禮、上下和同。
に作り、『孔子家語』論禮篇も同じ。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は、第三起にある。

「禾」は、「和」の省字または通假字。「禾」と「和」の互用・通假例は、『莊子』山木篇に、
一上一下、以和爲量。

とあり、『呂氏春秋』必己篇に、
 一上一下、以禾爲量。
 とある（『古字通假會典』六六八頁参照）。

【15】「亡備(服)[之]斃(喪)、己(以) 畜蠱(萬)邦。ㄥ」について。
 『禮記』孔子閒居篇は、
 無服之喪、以畜萬邦。
 に作り、『孔子家語』論禮篇は、
 無服之喪、施及萬邦。
 に作る。しかし、『禮記』孔子閒居篇のこの句は、第三起にある。

「之」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」と同様に「之」字を補う。『禮記』孔子閒居篇は「之」に作る。

「ㄥ」は、「濮茅左」・「季旭昇 3」も指摘する通り、章の終わりを示す評點符號。
 『禮記』孔子閒居篇はこの後も、
 子夏曰、三王之德、參於天地。敢問、何如斯可謂參天地矣。孔子曰……
 とあり、文章が續いていくが、本篇はここで終了している。

「亡聖之縵、喪忠既從。亡體之豊、上下禾同。亡備[之]斃、己畜蠱邦。ㄥ」における押韻關係について。「從」、「同」、「邦」はともに東部に屬しており、この文章が押韻していることがわかる。また、『禮記』孔子閒居篇の第二起に、
 無聲之樂、氣志既從。無體之禮、上下和同。無服之喪、以畜萬邦。
 とあり、「從」「同」「邦」がそれぞれ東部で押韻している。

『民之父母』と『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇における五起の並び方の違いについて。

以下は、「無聲之樂、無體之禮、無服之喪」の『民之父母』・『禮記』孔子閒居篇・『孔子家語』論禮篇の説明における順序を圖示する。

第一起

	無聲之樂	無體之禮	無服之喪	韻部
民之父母	喪(氣)忠(志) 不悫(違)	禦(威)我(儀)巨(遲遲)	内虐(怨)訥(洵)悲	微・脂
禮記	氣志不違	威儀遲遲	内恕孔悲	微・脂
孔子家語	氣至不違	威儀遲遲	内恕孔哀	微・脂

第二起

	無聲之樂	無體之禮	無服之喪	韻部

民之父母	塞(塞)于四方	日逮(就)月昧(將)	屯(純)叟(德)同 (孔)明	陽
禮記	氣志既得	威儀翼翼	施及四國	職
孔子家語	所願必從	上下和同	施及萬邦	東

第三起

	無聲之樂	無體之禮	無服之喪	韻部
民之父母	它(施)叟(及)孫 (孫子)	塞(塞)于四溷(海)	爲民父母	之
禮記	氣志既從	上下和同	以畜萬邦	東
孔子家語				

第四起

	無聲之樂	無體之禮	無服之喪	韻部
民之父母	叟(氣)[志]既叟 (得)	崇(威)我(儀)異 (翼翼)	它(施)叟(及)四或 (域)	職
禮記	日聞四方	日就月將	純德孔明	陽
孔子家語				

第五起

	無聲之樂	無體之禮	無服之喪	韻部
民之父母	叟(氣)叟既從	上下禾(和)同	巳(以)畜萬(萬)邦	東
禮記	氣志既起	施及四海	施于孫子	之
孔子家語				

本稿は、二〇〇三年四月に第一回上海博楚簡研究會で発表した譯注原稿を基にしたものである。この研究會で多くのご指摘を頂いた数ヶ月後、幸いにも大西克也先生（東京大學助教授）の授業（「楚系文字研究」）で發表する機会を頂いた。この授業では上海博楚簡研究會に引き續いて大西克也先生、宮本徹先生（放送大學助教授）、曹峰先生（大東文化大學人文科學研究所所員）など多くの方から貴重なご意見を頂いた。また、その年が明けた二〇〇四年一月に本稿は譯者の修士論文の一部として提出した。そこでも修士論文の主査に当たられ、譯者の指導教官でもある池田知久先生、また副査の萩庭勇先生、同じく林克先生（以上、大東文化大學教授）からは厳しいご批判と貴重な助言を頂戴した。

本稿は決して譯者一人の力によるものではなく、多くの方々の助力によって支えられたものである。文末ながら感謝の意を表したい。